九曜文庫

やまとうたは人の心をたねとしてよろ
づのことの葉とぞなれりける世中にある人
ことわざしげきものなれば心におもふ
ことを見るものきくものにつけていひいだせ
るなり花になくうぐひす水にすむかはづ
のこゑをきけばいきとしいけるもの
いづれかうたをよまざりけるちからをも
いれずしてあめつちをうごかしめに
みえぬおに神をもあはれとおもはせ
おとこ女のなかをもやはらげたけき

もののふの心をもなぐさむるは哥なり
この哥あめつちのひらけはじまりける
ときよりいできにけり
あめのうきはしのしたにてめがみをがみとなりたまへることをいへるうたなり
しかあれども世につたはることは
ひさかたのあめにしてはしたてる姫に
はじまりしたてる姫はあめわかみこのめなり
せうとの神のかたちをかゝやくえうたへるえびすうたなるべし
あらかねのつちにしてはすさのをの
みことよりぞおこりけるちはやぶる神世には
哥のもじもさだまらずすなほにして

ことの心わきかたかりけらし人の世と
なりてすさのをのみことよりそみそ
もしあまりひともしはよみける
すさのをのみことはあまてるおほむ神のこのかみなり女と
すみたまはむとていつものくにゝ宮つくりし給ふ時に
その所にやいろの雲のたつをみてよみ給へるなり
八雲たついつもやへかきつまこめにやへかきつくるそのやへかきを
かくてそ花をめてとりをうらやみかすみを
あはれひつゆをかなしふ心ことはおほく
さまさまになりにけるとをき所も
いてたつあしもとよりはしまりて年月を
わたりたかき山もふもとのちりひちより

なりてあま雲たなひくまておひのほれる
ことくにこの歌もかくのことくなるへし
なにはつの歌はみかとのおほむはしめ也
おほさゝきのみかとのなにはつにてみこときこえける時
東宮をたかひにゆつりて位につき給はて三年に
なりにけれは王仁といふ人のいふかり思ひて
よみてたてまつりける歌也この花は梅の花を
いふなるへし
あさか山のことははうねめのたはふれよ
りよみて
葛城王をみちのおくへつかはしたりけるに国のつかさ
事おろそかなりとてまうけなとしたりけれと
すさましかりけれはうねめなりける女の
かはらけとりてよめる也これにそ王の心とけにける
このふた歌は

女乃父母乃家をはなれて嫁する人の
ころハ心をとゝのへて夫の家に入
ならひなれぬ事もかくれなき
まめやかにいたさせ給ひ女の心得の
ことハりをよく聞わきまへ

なにごと(?)も嫁する身のつゝしみ
今の世にハことにやさしく
嫁の作法をよく心得へし
男ハ外を勤め女は内を治む(?)
物の道理をわきまへて男女のへ
だてをしり心を用ひ

ふみの中にハ女の身のつゝしみ
かたちをとゝのへ心をたゝしく

君に仕へ奉り夫の家をたもち
こゝろを尽くし奉るへし
いにしへより女の道ハ
かくのごとし

古き書にもしるされたるとて
ふかき心ざしを持つへし

紙筆の道もおろそかにせす
硯の墨をすりて手習ひを
心にかけて励み給ふへし

とくあらはすへしなけれはとしくさうしうへにあらはれいてぬこゝろをいはんとて
このうたはいつはりのなきよなりせはいかはかりうれしからましといふこゝろなり
よろこひてや
あらはれん

いつゝにはたゝことうた

偽のなき世なりせはいかはかり人のこと
のはうれしからまし

これはうつゝのことをそのまゝにいひ[illegible]
心よりおもひしこと[illegible]やうやうあらはれん　山樵[illegible]
ところに[illegible]
なるうた

むつにはいはひうた

このとのはむへもとみけりさき草の
みつはよつはにとのつくりせりや

これは世をいはひてうちとけたるこゝろのよろこひをいはひたるうた也
あるはまた君をいはひ[illegible]
とりなしてもおなしことなり[illegible]
くはしくはこれにつきていふへし

今の世中色につき
人の心花になりにけるよりあた
なるうたはかなきことのみいてくれは色このみの
家にむもれ木の人しれぬこととなりてまめ
なるところには花すゝきほにいたすへき
ことにもあらすなりにたりその
はしめをおもへはかゝるへくなむあら
ぬいにしへの世ゝのみかと春の花の
朝あきの月のよことにさふらふひとひとを

侍ふ人々をめして事につけつゝ哥をたてまつらしめ
給ふあるは花をそふとてたよりなき所にまとひ
あるは月をおもふとてしるへなきやみに
たとれる心々を見給ひてさかしおろ
かなりとしろしめしけむしかあるのみにあらすさゝれ
いしにたとへつくは山にかけて
君をねかひよろこひ身にすきたのしひ
心にあまり富士の煙によそへて人をこひ
松虫の音に友をしのひ高砂住の江の
松もあひおひのやうにおほえ男山の
昔をおもひ出て女郎花の一時をくねる

にも哥をいひてそなくさめける又春の
あしたに花のちるを見秋の夕くれに
木の葉の落るをきゝあるはとしことに
かゝみのかけに見ゆる雪となみとをなけき
草のつゆ水のあはを見てわか身をおとろき
あるはきのふはさかえおこりて時をうしなひ
世にわひしたしかりしもうと
くなりあるは松山のなみをかけ野
中の水をくみ秋萩のしたはをなかめ
あかつきのしきのはねかきをかそへ
あるはくれ竹のうきふしを人にいひ

うつろひいにしへ世中はかくこそありけれ
今は富士の山も煙たゝずなり長柄の
はしもつくるなりときく人はうたに
のみぞ心をなぐさめけるいにしへよりかく
つたはるうちにもならの御時よりぞひろまり
にけるかの御代や哥の心をしろしめしたり
けむかの御時におほきみつのくらゐ
かきのもとの人丸なむ哥のひじりなり
ける是は君も人も身をあはせたりといふ
なるべし秋の夕龍田川に流るゝ紅葉をば
みかどの御めには錦とみたまひ春のあした
よしのの山のさくらは人丸か心には
雲かとのみなむおぼえける又山の辺
赤人といふ人ありけり哥にあやしく
たへなりけり人丸は赤人か上に
たゝむことかたく赤人は人丸か下に
たゝむことかたくなむありける
ならの御門の御哥 たつた川
紅葉ばみだれてながるめりわたらば錦中やたえなむ 人丸
梅花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれゝば
ほの〴〵とあかしの浦の朝霧に嶋がくれゆく舟をしぞ思
赤人 春の野にすみれつみにとこしわれぞ野をなつかしみ一夜ねにける
和哥の浦にしほみちくればかたをなみ
芦辺をさしてたづ鳴わたる

みえ給はぬ人とも糸の世には いはれ給ひて
のちのちにのこし給へる これもあはれの
ことばのながれを なむ 万えうの名
付られけるによりて のこりし
ことの心ざしは ふかく 人のもとにひとり
ゆくへもしらず こころざしあれはとおもはれ
ところなき所ぞ おもひけるにもあるの
御門もこのうたを ありてのち世ゝの
世の人のかなしむ かなしみのふかさ
ひとつありしを もとしたへる人

おほやけどころのものこのみて流されたる
ねざめの恋人の世にも恋のかなしさ
遍照の御ならひに世すての名をえ
そむく人のならひに僧正遍照といふ人
きかえあれしものとてよろ
かくれて名をなのらずしてさ
ぞうき心をすてころもうちはらひ
空蝉ともいはぬなりのこのみ
袖の心もなほあはれとおもひ さしのそく
むらさきの衣をきてそめし名も花の
わかれのおもかげにまかせてきこゆる
わがみのみやこをのこしてわかれて

いはゝしほめる花の色なくて
にほひのこれるかことし　月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
わか身ひとつはもとの身にして
おほかたは月をもめてしこれそこの
つもれは人のおいとなるもの　文屋の康秀は
ことははたくみにてそのさま身におはす　いはゝ
あき人のよききぬきたらんかことし
ふくからに秋の草木のしほるれはむへ山風をあらしといふらん
深草のみかとの御国忌に　草ふかき霞の谷にかけかくしてる日のくれしけふにやはあらぬ
宇治山の僧きせんは
ことはかすかにしてはしめおはりたしかならす
いはゝ秋の月をみるにあかつきの雲にあへるか

ことし　わか庵はみやこのたつみしかそすむ世をうち山と人はいふなり　よめる歌
おほくきこえねはかれこれをかよはして
よくしらす　小野小町はいにしへの衣通姫の
流なりあはれなるやうにてつよからす
いはゝよきをうなのなやめる所あるに
にたりつよからぬはをうなの歌なれは
なるへし　おもひつゝぬれはや人のみえつらん夢としりせはさめさらましを　色みえて
うつろふ物は世の中の人の心の花にそありける
わひぬれは身をうき草のねをたえてさそふ水あらはいなんとそ思ふ
衣通姫の哥　わかせこかくへきよひなりさゝかにの
くものふるまひかねてしるしも
大伴のくろぬしはそのさまいやし

たきゝおへる山人の花のかけにやすめるか
ことし
おもひいてゝこひしき時ははつかりのなきてわたると人しるらめや
かゝみ山いさたちよりてみてゆかむとしへぬる身はおいやしぬると
このほかの人々その
名きこゆるのへにおふるかつらのはひ
ひろこりはやしにしけき木の葉のこと
くにおほかれと哥とのみおもひ
てそのさましらぬなるへしかゝるに
いますへらきのあめのしたしろしめすこと
よつのときこゝのかへりになむ
なりぬるあまねきおほむうつくしみの

なみやしまのほかまてなかれひろき
おほむめくみのかけつくは山のふもとよりも
しけくおはしましてよろつのまつりことを
きこしめすいとまもろもろのことをすて
給はぬあまりにいにしへのことをもわすれし
ふりにしことをもおこし給ふとていまもみそなはし
後の世にもつたはれとて延
喜五年四月十八日に大内記きの
とものり御書ところのあつかり
きの貫之さきのかひのさう官

おほしかうちの躬恒右衛門府生
みふのたゝみねらにおほせられて
万えうしふにいらぬふるきうた
みつからのをもたてまつらしめ給ひて
なむそれか中にむめをかさすより
はしめてほとゝきすをきゝもみち葉
を折雪をみるにいたるまて又鶴
かめにつけて君をおもひ人をも
いはひ秋はきなつくさをみてつまを
こひあふさか山にいたりてたむけを

いのりあるは春夏秋ふゆにもいらぬ
くさくさの歌をなむえらはせ給ひ
けるすへて千うたはたまき名つけて
古今和歌集といふかくこのたひあつめ
えらはれて山したみつのたえすはまの
まさこのかすおほくつもりぬれは今は
あすかゝはのせになるうらみもきこえ
すさゝれ石のいはほとなるよろこひ
のみそあるへきそれまくらことは春の
花にほひすくなくしてむなしき

かゝる林ゆくのすゑ根ふかくてゆく
ゆくへのみちはわかちかたく
心まよひおり人ことはの雲ゐち
ぬかくしのおもふかたにゆくら
この世のおほすしもまよはれてこのみち
はまみちはとるむつかしきに雲ゐ
ならひあつまれと歌のもしもまよはる
うなゐとひはしのとは山かけ
うすひゆきつゝもとこの名はり
あるとやあはれや歌の本意とは
枝のたのおもて世にてまた能ふか
ならはゝりうたの法ひとつ
いまれはゝ歌の道をもとの
心をこえてうんへかゝ名は風の月純
みるかほつゝあはれこのをあそ雲
いまゆくひさしき絶えをも

古今和歌集巻第一

春哥上

ふるとしに春たちける日よめる

在原元方

としのうちに春はきにけり一とせを
こぞとやいはむことしとやいはむ

春たちける日よめる

紀貫之

袖ひちてむすびし水のこほれるを
春たつけふの風やとくらむ

題しらず　よみ人しらず

春霞たてるやいつこみよしのの
吉野の山に雪はふりつつ

二條のきさきの春のはしめの御哥

雪のうちに春はきにけりうくひすの
こほれる涙いまやとくらむ

題しらず　よみ人しらず

梅か枝にきゐるうくひす春かけて
鳴けともいまた雪はふりつつ

雪の木にふりかかれるをよめる

素性法師

春たては花とや見らむ白雪の
かかれる枝にうくひすのなく

題しらず　よみ人しらず

心さしふかくそめてしおりけれは
消あへぬ雪の花と見ゆらむ

ある人のいはくさきのおほきおほいまうちきみの哥也

二條后のとうくうのみやすん所ときこえける時
正月三日おまへにめしておほせこと
あるあひたに日はてりなから雪のかしらにふりかかりけるを

雪のかしらに降かゝりけるをよませ
給ける　文屋やすひて
春の日のひかりにあたる我なれと
かしらの雪となるそわひしき
雪の降けるをよめる
紀つらゆき
霞たちこのめも春の雪ふれハ
花なき里も花そちりける
春の始によめる　藤原言なほ
春やとき花やおそきとききわかん
うくひすたにもなかすもあるかな
春の始の歌　みふの忠岑
春きぬと人ハいへとも鶯の
なかぬかきりハあらしとそおもふ
寛平御時きさいの宮の哥合の哥
源まさすみ
谷風にとくる氷のひまことに
うち出る波や春のはつ花
紀とものり
花の香を風のたよりにたくへてそ

うくひすさそふしるへにはやる

大江千里

鶯の谷より出るこゑなくは
春くることをたれかしらまし

在原棟梁

春たてと花もにほはぬ山里は
ものうかるねに鶯そなく

よみ人しらす

野へちかく家ゐしせれは鶯の
なくなるこゑはあさな〳〵きく

春日野はけふはなやきそわか草の
つまもこもれり我もこもれり

春日野のとふひの野もり出て見よ
いまいくかありてわかなつみてん

み山には松の雪たにきえなくに
宮こは野へのわかなつみけり

梓弓おしてはるさめけふふりぬ
あすさへふらはわかなつみてん

仁和のみかとみこにおましましける
時に人にわかなたまひける

君か為春の野に出てわかなつむ
我衣手に雪はふりつゝ
謌よみてもて参らせよと仰せられ
けれはよみて参らせける
　　　　　　つらゆき
春日野の若菜つみにや白妙の
袖ふりはへて人の行らむ
之にいふつゝも　　在原行平朝臣
春のきる霞の衣ぬきをうすみ
山風にこそみたるへらなれ
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
　　　　源宗于朝臣
ときはなる松のみとりも春くれは
今ひとしほの色まさりけり
哥よみてもて参らせよと仰せられし時
よみてまいらせける
　　　　　　つらゆき
我せこか衣はるさめふるたひに
のへのみとりそ色まさりける
青柳の糸よりかくる春しもそ

みたれて花のほころひにける

西大寺のほとりの柳をよめる

僧正遍昭

あさ緑いとよりかけて白露を
玉にもぬける春の柳か

題しらす　よみ人しらす

もゝちとり囀る春はものことに
あらたまれとも我そふりゆく

をちこちのたつきもしらぬ山中に
おほつかなくもよふこ鳥かな

かりのこゑをきゝてこしへまかりにける
人をおもひてよめる

凡河内躬恒

春くれは雁かへるなり白雲の
みちゆきふりにことやつてまし

帰雁をよめる

伊勢

春霞たつを見すてゝゆく雁は
花なき里にすみやならへる

題しらす　よみ人しらす

折つれは袖こそにほへ梅の花
ありとやこゝにうくひすのなく
色よりもかこそあはれとおもほゆれ
たか袖ふれし宿の梅そも
宿ちかく梅の花うゑしあちきなく
まつ人のかにあやまたれけり
梅花たちよるはかりありしより
人のとかむるかにそしみぬる
梅の花を折てよめる
東三条の左のおほいまうちきみ
鶯のかさにぬふてふ梅の花
折てかさゝん老かくるやと
題しらす　素性法師
よそにのみあはれとそ見し梅の花
あかぬ色かは折てなりけり
梅の花を折て人におくりける
とものり
君ならて誰にか見せむ梅の花
色をもかをもしる人そしる
くらふ山にてよめる

法以紀

梅花かをる宿へくる人梅風より
やどにほどとまるらんそこにまる
月夜は梅の花にほひてとふ人のかひ
ありかほりとてよ詠る

以法親

月夜はさえたるもみぢにも法の花
かぜにさそはれてにほふかぜもまちかねて
こよひの夜梅の花にほひよ詠る
春の夜の風に吹なかる梅の花

色にみえねどかくれなき
ことを法ることに風ぞみちて
人の家に風ぞ吹てやかて
梅よりまさる花の家ふかく
かくれなきにほひ風ぞうつるとも
出して待るかそこにそへてまする
梅花をおりてよ詠る

法以紀

人をさそふ心ならし風にまかせ
花をもとめし人のふかきにほひ詠る

水のほとりに梅花のさけりけるを
よめる
伊勢
春ことになかるゝ川を花とみて
おられぬ水に袖やぬれなむ
年をへて花のかゝみとなる水は
ちりかゝるをやくもるといふらむ
家にありける梅の花のちりけるを
よめる
貫之
くるとあくとめかれぬものを梅の花
いつの人まにうつろひぬらむ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた
よみ人しらす
梅かゝを袖にうつしてとゝめては
春はすくとも形見ならまし
素性法師
ちるとみてあるへきものを梅の花
うたてにほひの袖にとまれる
よみ人しらす
ちりぬともかをたに残せ梅の花
恋しき時のおもひ出にせむ

人の家にうへたりけるさくらの
花のさきはしめたりけるを見てよめる
つらゆき
ことしより春しりそむるさくら花
ちるといふ事はならはさらなむ
題しらす　よみ人しらす
山たかみ人もすさめぬさくら花
いたくなわひそ我見はやさむ
又は　さとゝほみ人もすさめぬ山さくら
山さくら我見にくれは春かすみ
みねにもをにもたちかくしつゝ
染殿の后のおまへに花かめに桜の
花をさゝせたまへるを見てよめる
前太政大臣
年ふれはよはひはおいぬしかはあれと
花をしみれはもの思ひもなし
なきさの院にてさくらを見てよめる
在原業平朝臣
世中にたえてさくらのなかりせは
春の心はのとけからまし

題しらず　　　よみ人しらず

いしばしるたきなくもがなさくら花
たをりてもこむみぬ人のため

山のさくらをみてよめる

素性法師

みてのみや人にかたらむさくら花
てごとにおりていへづとにせむ

花ざかりに京をみやりてよめる

見わたせば柳さくらをこきまぜて
宮こぞ春のにしきなりける

さくらの花のもとにて年のおいぬる
ことをなげきてよめる

きのとものり

色もかもおなじむかしにさくらめど
年ふる人ぞあらたまりける

おれるさくらをよめる

つらゆき

たれしかもとめておりつる春霞
たちかくすらむ山のさくらを

歌たてまつれとおほせられし時

よみてたてまつれる
さくら花咲にけらしな足曳乃
山のかひよりみゆるしら雲
寛平御時きさいの宮の歌合のうた　　とものり
みよしのの山へにさけるさくら花
雪かとのみそあやまたれける
やよひにうるふ月のありける年
よみける　　伊勢
さくら花春くははれる年たにも
人の心にあかれやはせぬ
さくら花のさかりにひさしく
とはさりける人のきたりける時に
よみける　　よみ人しらす
あたなりと名にこそたてれ桜花
としにまれなる人もまちけり
返し　　なりひらの朝臣
けふこすはあすは雪とそふりなまし
消すはありとも花とみましや
題しらす　　よみ人しらす

あねせはひかれとまつな花のいと
いやはさくらかいつしかはてしめん
をりとらはをしけにもあるか桜花
いさやとかりてちるまてはみむ
きのありとも
さくら色に衣はふかくそめてきむ
花のちりなむ後のかたみに
さくらの花のさけりけるを見にまうてきたりし
ける人によみてをくりける
をくりける
躬恒
我宿の花見かてらにくる人は
ちりなむのちそこひしかるへき
亭子院歌合の時よめる
伊勢
みる人もなき山さとのさくら花
ほかのちりなむのちそさかまし

古今和歌集巻第二

春哥下

題しらす　よみ人しらす

はるかすみたなひく山のさくら花
うつろはむとや色かはりゆく

まてといふにちらてしとまる物ならは
なにをさくらに思ひまさまし

残りなくちるそめてたきさくら花
ありて世中はてのうけれは

この里に旅ねしぬへしさくら花
ちりのまかひに家路わすれて

うつせみの世にもにたるか花さくら
咲くとみしまにかつちりにけり

僧正遍昭によみておくりける　これたかのみこ

桜花ちらはちらなむちらすとて
ふるさと人のきても見なくに

雲林院にてさくらの花のちりけるを
みてよめる　承均法師

さくらちる花の所は春なから
雪そふりつゝ消かてにする

さくらの花のちり侍りけるを見て
よめる　　素性法師

花ちらす風のやとりはたれかしる
我にをしへよ行てうらみむ

うりむ院にてさくらの花のちりけるを見てよめる
承均法師

いさ桜我もちりなむひとさかり
ありなは人にうきめみえなむ

あひしれりける人のまうてきて
かへりにける後によみて花にさして
つかはしける
つらゆき

ひとめ見し君もやくると桜花
けふはまちみてちらはちらなむ

山のさくらを見てよめる

春霞なにかくすらむさくら花
ちるまをたにもみるへき物を

心ちそこなひてわつらひける時に

風にあたらしとておろしこめて
のみ侍けるあひたにおれる桜
のちりかたになれりけるをみて
よめる
藤原よるかの朝臣
たれこめて春のゆくゑもしらぬまに
まちしさくらもうつろひにけり
東宮雅院にて桜乃花のみかは
水にちりてなかれけるをよめる
すかのゝ高世
枝よりもあたにちりにし花なれは
おちても水の泡とこそなれ
さくら乃花のちりけるをよめる
つらゆき
ことならはさかすやはあらぬさくら花
みる我さへにしつ心なし
さくらのことくとくちる物はなしと
人のいひけれはよめる
さくら花とくちりぬともおもほえす
人の心そ風もふきあへぬ
さくら乃花のちりけるをよめる

きのとものり

久かたのひかりのとけき春の日に
しつ心なく花のちるらむ

春宮のたちはきのちんにて
さくらの花のちるをよめる

藤原よしかせ

春風は花のあたりをよきてふけ
心つからやうつろふとみむ

さくらのちるをよめる

凡河内みつね

雪とのみふるたにあるをさくら花
いかにちれとか風のふくらむ

ひえにのほりてかへりまうてきて
よめる

つらゆき

山たかみみつゝわかこしさくら花
風は心にまかすへらなり

たいしらす

大伴くろぬし

春雨のふるは涙かさくら花
ちるをおしまぬ人しなけれは

亭子院歌合うた

つらゆき

さくら花ちりぬる風のなごりには
水なき空に波ぞたちける

ならの御かど御うた

ふるさとゝなりにしならのみやこにも
色はかはらず花はさきけり

春の歌とてよめる

よしみねのむねさだ

花の色はかすみにこめてみせずとも
香をだにぬすめ春の山風

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

そせい法師

花の木も今はほりうゑじ春たてば
うつろふ色に人ならひけり

だいしらず　よみ人しらず

春の色のいたりいたらぬ里はあらじ
さけるさかざる花のみゆらん

春のうたとてよめる

つらゆき

みわ山をしかもかくすか春霞

人にしられぬ花やさくらむ

うりん院のみこのもとに花見に
きた山のほとりにまかれりける時
よめる　　素性法師

いざけふは春の山べにまじりなむ
くれなばなげの花のかげかは

はるのうたとてよめる

いつまでか野べに心のあくがれむ
花しちらずは千世もへぬべし

だいしらず　　よみ人しらず

春ごとに花のさかりはありなめど
あひ見むことは命なりけり

花のごと世のつねならばすぐしてし
むかしはまたもかへりきなまし

吹風にあつらへつくるものならば
このひともとはよきよといはまし

待人もこぬものゆへにうぐひすの
鳴つる花を折てけるかな

寛平御時きさいの宮の歌合哥

藤原おきかぜ

さく花はちくさなからにあたなれと
たれかは春をうらみはてたる
春霞色のちくさに見えつるは
たなひく山の花のかけかも

在原元方

霞たつ春の山へはとほけれと
吹くる風は花のかそする

うつろへる花を見てよめる

みつね

花見れは心さへにそうつりける
色にはいてし人もこそしれ

題しらす　よみ人しらす

鶯のなくのへことにきてみれは
うつろふ花に風そ吹ける
吹風をなきてうらむな鶯は
我やは花にてたにふれたる

典侍洽子朝臣

散花のなくにしとまるものならは
我鶯におとらましやは

仁和の中将のみやすん所の家に

歌合せんとてしけるときによめる

藤原後蔭

花のちることやわひしき春かすみ
たつた山のうくひすのこゑ

うくひすのなくをよめる

そせい

こつたへはおのかはかせにちる花を
たれにおほせてこゝらなくらん

鶯の花の木にてなくをよめる

みつね

しるしなきねをもなくかな鶯の
ことしのみちる花ならなくに

題しらす

よみ人しらす

こまなめていさ見にゆかんふるさとは
雪とのみこそ花はちるらめ

ちる花をなにかうらみん世中に
わか身もともにあらんものかは

小野小町

花の色はうつりにけりないたつらに
わか身よにふるなかめせしまに

仁和の中将のみやすん所の家に
哥合せんとしける時によめる

そせい

おしと思ふ心はいとによられなむ
ちる花ことにぬきてとゝめむ

志かの山こえに女のおほくあへりける
によみてつかはしける

つらゆき

あつさゆみ春の山へをこえくれは
みちもさりあへす花そちりける

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

春の野にわかなつまむとこしものを
ちりかふ花にみちはまとひぬ

山てらにまうてたりけるによめる

やとりして春の山へにねたる夜は
夢のうちにも花そちりける

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

吹風と谷の水としなかりせは
み山かくれの花を見ましや

志かよりかへりけるをうなともの

花山に入りて藤の花のもとに立ち
よりてかへりけるによみておくり
ける
僧正遍昭
よそに見てかへらん人に藤の花
はひまつはれよ枝はをるとも
家に藤の花さけりけるを人の
たちとまりて見けるをよめる
みつね
我宿にさける藤浪たちかへり
すきかてにのみ人の見るらむ

題しらず　よみ人しらず
今もかも咲にほふらむ橘の
こしまのさきの山吹の花
春雨ににほへる色もあかなくに
香さへなつかし山吹の花
山吹はあやなゝさきそ花見むと
うへけむ君かこよひこなくに
よしの川のほとりに山吹の
さけりけるをよめる
つらゆき

よしの川きしの山吹ふく風に
そこのかげさへうつろひにけり

題しらず　よみ人しらず

かはづなくゐでの山吹ちりにけり
花のさかりにあはましものを

この歌はある人のいはくたちばなの
きよともが歌なり

春の歌とてよめる　そせい

おもふどち春の山辺にうちむれて
そこともいはぬたびねしてしか

春のとくすぐるをよめる　みつね

あづさゆみ春たちしより年月の
いるがごとくもおもほゆるかな

やよひに鶯のこゑのひさしう
きこえざりけるをよめる

つらゆき

鳴とむる花しなければ鶯も
はてはものうくなりぬべらなり

やよひのつこもりかたに山を
こえけるに山川より花のなかれ
けるをよめる

ふかやふ

花ちれる水のまにまにとめくれは
山には春もなくなりにけり

春をおしみてよめる

もとかた

おしめともとまらなくに春かすみ
かへるみちにしたちぬとおもへは

寛平御時きさいの宮の歌合の
うた

おきかせ

声たえすなけや鶯ひとゝせに
ふたゝひとたにくへき春かは

やよひのつこもりの日花つみより
かへりける女ともを見てよめる

みつね

とゝむへき物とはなしにはかなくも
ちる花ことにたくふ心か

やよひのつこもりの日雨のふりける

ふりけるに藤の花をおりて人につかはし
ける　なりひらの朝臣
ぬれつゝそしゐておりつる年の内に
春はいく日もあらしとおもへは
亭子院の歌合に春のはてのうた
みつね
けふのみと春をおもはぬ時たにも
たつことやすき花のかけかは

古今和歌集巻第三

夏哥

題しらす　読人しらす
我宿の池の藤波さきにけり
山郭公いつかきなかむ
この哥ある人のいはく柿本人丸か也
う月にさける桜を見てよめる
紀としさた
哀てふことをあまたにやらしとや
春におくれてひとりさくらむ

題しらす　よみ人しらす

卯月まつ山ほとゝきすうちはふき
今もなかなむこそのふるこゑ

伊勢

卯月に咲し梅をみてむかしをこひしくは
まつ花[illegible]とこそきゝつれ

讀人しらす

さ月まつ花橘の香をかけは
むかしの人の袖の香そする

いつのまにさ月きぬらん足引の
山ほとゝきす今そなくなる

[illegible]
花そちるらん[illegible]

吉野山[illegible]郭公の
鳴をきゝてよめる

[illegible]

吉野山[illegible]
梢たかくそなくなる
郭公[illegible]
[illegible]てよめる

春雁

帰るゝ霞にけふやあらはれて
よしさくらね忘せて帰るらむ
なかれゆくの跡ておほく帰るの
鳴音よ空る

石上梅か枝さすのかよふには
霞かゝりてものかりけれ
そしはつゝを　まつ余念てを
夜山をかよふかよふは心あるは
地のの我しらぬなきさせる

かくこは霞にけふは別れ
梅のつくへて忘れし春る
帰るか雲風おもておも迷ひ
折をまれぬおりかのみのかう
おりはい流るゝ紅の山のかさ霞
うらみかゆかりしそてまく　あ
霞のうへに流る見る花なかさ霞
我衣てのひかりそふかなも
足引の山ふきおもしろく色なく
花の色さやか猶なき思ひそめにく

今さらに山へかへるなほとゝきす
こゑのかきりは我宿になけ

みくにのまち

やよやまて山ほとゝきすことつてん
我世中にすみわひぬとよ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

とものり

さみたれに物おもひをれはほとゝきす
夜ふかくなきていつちゆくらむ
よやくらきみちやまとへるほとゝきす
我宿をしもすきかてになく

大江千里

やとりせし花橘もかれなくに
なとほとゝきすこゑたえぬらむ

つらゆき

夏の夜のふすかとすれはほとゝきす
なく一こゑにあくるしのゝめ

たゝみね

くるゝかとみれはあけぬる夏の夜を
あかすとやなく山ほとゝきす

紀秋岑

夏山に恋しき人やいりにけむ
こゑふりたてゝなくほとゝきす

題しらす　讀人しらす

こその夏なきふるしてしほとゝきす
それかあらぬかこゑのかはらぬ

ほとゝきすのなくをきゝてよめる

貫之

五月雨のそらもとゝろにほとゝきす
なにをうしとかよたゝなくらむ

さふらひにてをのこともの酒たうへけ
るにめしてほとゝきすまつ哥
よめとありけれはよめる

躬恒

郭公こゑもきこえす山ひこは
ほかになくねをこたへやはせぬ

山にほとゝきすのなきけるをきゝてよめる

貫之

郭公人まつ山になくなれは
我うちつけにこひまさりけり

くやしくもまちつる程に新玉の
なかれゆく年はくれてそみゆる
みつね
むかしへや今も恋しき郭公は
ゆきかへりしはゆきてきつらむ
新玉の年のをはりのくれてそみゆる
これのり
新玉の秋とおもはむうつろふの
うれ世中はあはれとそおもふらむ
さらさの浪ははやくそみゆる

僧正遍昭
さらぬまのほとにはしはしかへりて
なかれゆく露をはかりとのこらむ
月のおのかうつろふ秋のくさ
うつろはぬみゆる　紹介
夜風のおもひさはしめりぬ
雲のうへにはれやらぬらむ
こよひこそは夜の光そみゆ
たえせぬ心はあはれそこの
うらはかなく流れつきぬる

みつね

ちりをたにすゑしとそおもふさきしより
いもとわかぬるとこなつの花

みな月のつこもりの日よめる

夏と秋と行かふそらのかよひちは
かたへすゝしき風やふくらむ

古今和歌集巻第四

秋哥上

秋立日よめる　藤原敏行朝臣

秋きぬとめにはさやかに見えねとも
風のをとにそおとろかれぬる

秋立日うへのをのこともかもの
かはらに川せうえうしけるともに
まかりてよめる

つらゆき

河風のすゝしくもあるかうちよする

浪とゝもにや秋はたつらむ
つらゆき　讀人志らす
我せこか衣のすそを吹かへし
うらめつらしき秋のはつ風
昨日こそさなへとりしかいつのまに
いなはそよきて秋風のふく
秋風の吹にし日より久かたの
あまのかはらにたゝぬ日はなし
久かたのあまのかはらのわたしもり
君わたりなはかちかくしてよ
天川もみちをはしにわたせはや
たなはたつめの秋をしもまつ
恋々てあふよはこよひあまの川
霧たちわたりあけすもあらなむ
寛平御時なぬかのよのうへにさふ
らふをのこともうたたてまつれと仰
られける時人にかはりてよめる
とものり
あまの川あさせしら浪たとりつゝ
わたりはてねはあけそしにける

おなし御時きさいの宮の哥合のうた
藤原おきかせ

契りけむ心そつらき七夕の
としにひとたひあふはあふかは

なぬかの日のよよめる
凡河内躬恒

としことにあふとはすれと七夕の
ぬるよのかすそすくなかりける

七夕にかしつるいとのうちはへて
としのをなかくこひやわたらん

題しらす
そせい

こよひこむ人にはあはし七夕の
ひさしきほとにまちもこそすれ

なぬかの夜のあかつきによめる
源むねゆきの朝臣

今はとてわかるゝ時はあまの川
わたらぬさきに袖そひちぬる

八日のひよめる
みふのたゝみね

けふよりは今こむとしのきのふをそ

いはしかくのこ詠じてなん有ける
こそいふなれ　とある人のいへる
ながめやりけるを人々月の影ならで
心ならぬの枝にさかりなり
たゝかれ枝ならむかつは我身なれ
ものしきりのおもひにもとめ通
秋露なくる枝しもおつるかな
吉野猶こけるまゆもおつさ
かゝれ枝なかきりのみな流
うれうひ絶ぬ流とおりけん代

ひらかなここは万葉集にありけるを
枝なり、ひとつ露ならむとなり
忘れさこ以見ぬ家経合に
流は以時なりけり枝乃ふかう
めおりふしのかさなりたり
人なりの流わすみてあきまで
枝乃根おもひさしみな流るゝよ
よ絶なる　　そら猶
かゝりけりおもひにかゝるを
猶てあるなれんへきそう説

題しらす　　　　　　讀人しらす

白雲にはねうちかはしとふかりの
かすさへみゆる秋のよの月

さよなかとよはふけぬらしかりかねの
きこゆるそらに月わたるみゆ

これさたのみこの家の歌合によめる

大江千里

月みれはちゝにものこそかなしけれ
わか身ひとつの秋にはあらねと

忠岑

ひさかたの月のかつらも秋はなほ
もみちすれはやてりまさるらむ

月をよめる　　　　在原元方

秋の夜の月のひかりしあかけれは
くらふの山もこえぬへらなり

人のもとにまかれりける夜きりきりすの
なきけるをきゝてよめる

藤原たゝふさ

きりきりすいたくななきそ秋の夜の
なかきおもひはわれそまされる

是貞親王の家の哥合のうた

としゆきの朝臣

秋の夜のあくるもしらすなく虫は
我ことものやかなしかるらむ

題しらす　よみ人しらす

秋萩も色付ぬれはきり〳〵す
我ねぬことや夜はかなしき

秋の夜は露こそことにさむからし
草むらことにむしのわふれは

君忍ふ草にやつるゝふるさとは
まつむしのねそかなしかりける

秋の野に道もまとひぬまつむしの
こゑするかたに宿やからまし

秋の野に人まつ虫のこゑすなり
我かとゆきていさとふらはん

もみちはのちりてつもれる我宿に
誰を松むしこゝらなくらむ

ひくらしのなきつるなへに日は暮ぬと
おもふは山のかけにそありける

日くらしのなく山さとの夕暮は

風よりほかにとふ人もなし

はつかりをよめる

在原元方

待人にあらぬ物からはつかりの
けさなく声のめつらしきかな

是貞のみこの家歌合によめる

とものり

秋風にはつかりかねそきこゆなる
たかたまつさをかけてきつらむ

たいしらす　　よみ人しらす

我かとにいなおほせとりのなくなへに
けさふく風にかりはきにけり

いとはやもなきぬるかりか白露の
いろとる木々ももみちあへなくに

春霞かすみていにしかりかねは
今そなくなる秋霧のうへに

夜をさむみ衣かりかねなくなへに
萩の下葉もうつろひにけり

この歌はある人のいはく柿本人麿か也

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原菅根朝臣

秋風にこゑをほにあげてくる船は
あまのとわたる雁にぞありける

かりのなきけるをききてよめる

みつね

うきことをおもひつらねて雁がねの
なきこそわたれ秋のよなよな

是貞のみこの家の歌合のうた

たゝみね

山里は秋こそことにわびしけれ
しかのなくねにめをさましつゝ

読人しらず

おく山にもみぢふみわけなくしかの
こゑきく時ぞ秋はかなしき

題しらず

秋萩にうらびれをればあしひきの
山したとよみしかのなくらむ

秋萩をしがらみふせてなくしかの
めにはみえずておとのさやけさ

これさだのみこの家の歌合によめる

萩露似玉

秋萩の花さくよをらぬまにハ
おのへのたえくいまやすくらむ
むしろかひとつて侍まくらの
袖のうへてあひくゆるき雲
流おそてにはよぬる

こつ称

秋の露の梅えしけるかされ
りの心ちまずれさま寄り
そいきつると
しあ人ハきつると

あき萩の下葉も浅く今よりや
ひとりある人のいねかてにする
鳴るゝ一程の浅くおらかん
りのおりの風との萩の上の露
萩の露玉まぬきとめぬまゝ
らしらむ人ら枝かくしみよ
あらへのつくりたまかまるかな
おりてこそおちてミぬへき萩の
枝もたゝにはまらつ露
萩の花ちりけむ小野の露霜に

ぬれてをゆかむさよはふくとも

是貞のみこの家の歌合によめる

文屋あさやす

秋の野におく白露は玉なれや
つらぬきかくるくものいとすち

題しらす

僧正遍昭

なにめてておれるはかりそ女郎花
我おちにきと人にかたるな

僧正遍昭かもとにならへまかりける
ときにおとこ山にて女郎花
をみてよめる　布留今道

女郎花うしとみつつそ行過る
おとこ山にしたてりとおもへは

是貞のみこの家の歌合のうた

としゆきの朝臣

秋の野にやとりはすへし女郎花
なをむつましみたひならなくに

をののよしき

女郎花おほかるのへにやとりせは
あやなくあたの名をやたちなむ

朱雀院の女郎花合によみて
たてまつりける
左のおほいまうち君
女郎花秋の野風にうちなひき
心ひとつをたれによすらむ
藤原定方朝臣
秋ならてあふことかたき女郎花
あまのかはらにおひぬものゆへ
紀貫之
たか秋にあらぬものゆへ女郎花
なそ色に出てまたきうつろふ
みつね
妻こふる鹿そなくなるをみなへし
をのかすむ野の花としらすや
をみなへしふきすきてくる秋風は
めにはみえねとかこそしるけれ
たゝみね
人のみることやくるしきをみなへし
秋霧にのみたちかくるらむ
ひとりのみなかむるよりは女郎花

我すむやとにうゑてみましを
物へまかりけるに人の家に女郎花
うゑたりけるをみてよめる
兼覧王
女郎花うしろめたくもみゆる哉
あれたるやとにひとりたてれは
寛平御時蔵人所のをのこと
さかのに花みむとてまかりたりける
時かへるとてみな歌よみけるついて
によめる
平さたふん
花にあかてなにかへるらむ女郎花
おほかるのへにねなましものを
是貞のみこの家の歌合によめる
としゆきの朝臣
なに人かきてぬきかけし藤はかま
くる秋ことにのへをにほはす
ふちはかまをよみて人につかはしける
つらゆき
やとりせし人のかたみか藤はかま

忘られかたきかににほひつゝ
ふちはかまをよめる
そせい
ぬしゝらぬかこそにほへれ秋のゝに
たかぬきかけしふちはかまそも
たいしらす　平貞文
今よりはうへてたにみし花すゝき
ほにいつる秋はわひしかりけり
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
ありはらのむねやな
秋の野の草のたもとか花すゝき
ほにいてゝまねく袖とみゆらむ
素性法師
我のみやあはれとおもはむきり〱す
なくゆふかけのやまとなてしこ
たいしらす　よみ人しらす
みとりなるひとつ草とそ春はみし
秋はいろ〱の花にそありける
もゝくさの花のひもとく秋のゝに
おもひたはれむ人なとかめそ

月草に衣はすらむあさ露に
ぬれてのゝちはうつろひぬとも
仁和のみかとみこにおはしましける時
ふるのたき御覧せんとておはしましける
みちに遍昭か母の
家にやとりたまへりける時に庭を
秋の野につくりておほむものかたりの
ついてによみてたてまつりける
僧正遍昭
里はあれて人はふりにしやとなれや庭もまかきも
秋の野らなる

古今和歌集巻第五

秋哥下

是貞のみこの家の哥合のうた

文屋やすひて

吹からに秋の草木のしほるれはむへ山風をあらしといふらむ

草も木も色かはれともわたつうみの浪の花にそ秋なかりける

秋の哥合しける時よめる

きのよしもち

もみちせぬときはの山はふく風のをとにや秋をきゝわたるらむ

題しらす

よみ人しらす

霧たちて雁そなくなる片岡の朝の原はもみちしぬらむ

神な月時雨もいまたふらなくにかねてうつろふ神なひの森

ちはやふる神なひ山のもみちはにおもひはかけしうつろふ物を

貞観の御時綾綺殿のまへに梅の

木ありけりにしのかたにさせりける
枝のもみちはしめたりけるをうへにさふらふ
をのこともの哥よみける
ついてによめる

藤原かちおむ

おなしえをわきて木のはのうつろふは
西こそ秋のはしめなりけれ

いし山にまうてける時おとは山の紅葉
を見てよめる　　つらゆき

秋風の吹にし日よりおとは山
みねのこすゑも色付にけり

これさたのみこの家の哥合によめる

としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして
秋の木のはをちゝにそむらむ

壬生忠岑

秋の夜の露をは露とおきなから
かりの涙や野へをそむらむ

たいしらす　　読人しらす

秋の露色々ことにおけはこそ

山乃木のはのちくさなるらめ
もる山のほとりにてよめる
つらゆき
しら露も時雨もいたくもる山は
下葉のこらす色付にけり
秋の歌とてよめる
ありはらのもとかた
雨ふれと露ももらしをかさとりの
山はいかてかもみちそめけん
神の社のあたりをまかりける
時にいかきのうちのもみちをみて
よめる
つらゆき
ちはやふる神のいかきにはふくすも
秋にはあへすうつろひにけり
是貞のみこの家の歌合によめる
たゝみね
雨ふれはかさとり山のもみちはゝ
行かふ人の袖さへそてる
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
よみ人しらす

ちらねともかねてそおしき紅葉は
今はかきりの色と見つれは
大和の國にまかりける時佐保山に
きりのたてりけるを見てよめる
きのとものり
たか為の錦なれはか秋きりの
さほの山へをたちかくすらむ
是貞のみこの家の歌合のうた
よみ人しらす
秋霧はけさはなたちそさほ山の
はゝそのもみちよそにても見む
あきのうたとてよめる
坂上これのり
佐保山のはゝその色はうすけれと
秋はふかくもなりにけるかな
人のせむさいに菊にむすひつけて
うへけるうた　在原なりひらの朝臣
うへしうへは秋なき時やさかさらむ
花こそちらめねさへかれめや
寛平御時きくの花をよませ給ける

としゆきの朝臣

久かたの雲のうへにて見る菊は
あまつほしとそあやまたれける

この哥はまた殿上ゆるされさりける
時めしあけられてつかうまつれる
となむ

これさたのみこの家の哥合のうた

きのとものり

露なからをりてかさゝむきくの花
おいせぬ秋のひさしかるへく

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

大江千里

うへし時花まちとをにありし菊
うつろふ秋にあはむとやみし

おなし御時せられける菊合に
すはまをつくりて菊の花うへたりけるに
くはへたりけるうたふきあけの
はまのかたにきくうへたりける
によめる

すかはらの朝臣

秋風のふきあけにたてるしらきくは

花かあらぬかなみのよするか

仙宮に菊をわけて人のいたれる
かたをよめる

素性法師

ぬれてほす山路の菊の露のまに
いつか千とせを我はへにけむ

菊の花のもとにて人の人まてる
かたをよめる

とものり

花見つゝ人まつ時はしろたへの
袖かとのみそあやまたれける

大沢の池のかたに菊うへたるを
よめる

ひともとゝおもひし花をおほさはの
池のそこにもたれかうへけむ

世中のはかなき事をおもひけるおりに
菊の花をみてよめる

つらゆき

秋の菊にほふかきりはかさしてむ
花よりさきとしらぬわか身を

白菊の花をよめる

凡河内躬恒

心あてにおらはやおらむはつしもの
おきまとはせるしらきくの花

これさたのみこの家の歌合のうた
よみ人しらす

色かはる秋の菊をはひとゝせに
ふたゝひにほふ花とこそ見れ

仁和寺に菊の花めしける時に
うたそへてたてまつれとおほせ
られけれはよみてたてまつりける

平さたふん

秋をおきて時こそ有けれ菊の花
うつろふからに色のまされは

人の家なりける菊の花をうつし
うへたりけるをよめる

つらゆき

さきそめし宿しかはれは菊の花
色さへにこそうつろひにけれ

題しらす
よみ人しらす

さほ山のはゝそのもみち散ぬへみ

よるさへみよとてらす月かげ

宮つかへひさしうつかうまつらで
山里にこもり侍りけるによめる

藤原関雄

おく山のいはかきもみぢちりぬべし
てる日のひかりみる時なくて

題しらず　よみ人しらず

竜田川紅葉みだれてながるめり
わたらばにしき中やたえなむ

この歌はある人ならのみかどの御歌となむ申す

題しらず

竜田川もみぢばながる神なびの
みむろの山に時雨ふるらし

又はあすかがはもみぢばながる

恋しくはみてもしのばむもみぢばを
吹きなちらしそ山おろしの風

秋風にあへずちりぬるもみぢばの
ゆくへさだめぬ我ぞかなしき

秋はきぬ紅葉は宿にふりしきぬ
道ふみわけてとふ人はなし

ふみわけてさらにやとはむもみちはの
ふりかくしてし道とみなから
秋の月山へさやかにてらせるは
おつるもみちのかすをみよとか
吹風の色のちくさにみえつるは
秋のこのはのちれはなりけり
せきを
霜のたてつゆのぬきこそよはからし
山のにしきのおれはかつちる
うりん院の木のかけにたゝすみて
よみける
僧正遍昭
わひ人のわきてたちよる木のもとは
たのむかけなく紅葉ちりけり
二條の后の春宮のみやす所と申ける
時に御屏風に竜田川に紅葉
なかれたるかたをかけりけるを題に
てよめる　そせい
もみちはのなかれてとまるみなとには
紅ふかき波やたつらむ
なりひらの朝臣

ちはやふる神代もきかす立田川
からくれなゐに水くゝるとは
これさたのみこの家の哥合に
としゆきの朝臣
我きつるかたもしられすくらふ山
木々のこのはのちるとまかふに
たゝみね
神なひのみむろの山を秋ゆけは
にしきたちきる心ちこそすれ
北山にもみちをらんとてまかれりける

時によめる　つらゆき
みる人もなくてちりぬるおく山の
紅葉はよるの錦なりけり
秋のうた　かねみの王
立田姫たむくる神のあれはこそ
秋の木の葉のぬさとちるらめ
をのといふ所に住侍ける時紅葉を
見てよめる　つらゆき
秋の山紅葉をぬさとたむくれは
すむ我さへそ旅心ちする

神なびの山をすぎて竜田川を
わたりける時に紅葉のながれ
けるをよめる　きよはらのふかやぶ

神なびの山をすぎゆく秋なれば
竜田川にぞぬさはたむくる

寛平御時きさいの宮の歌合のうた
藤原おきかぜ

白浪に秋のこのはのうかべるを
あまのながせる舟かとぞみる

竜田川のほとりにてよめる
坂上是則

もみぢ葉のながれざりせば竜田川
水の秋をばたれかしらまし

志賀の山ごえにてよめる
はるみちのつらき

山川に風のかけたるしがらみは
ながれもあへぬもみぢなりけり

池のほとりにて紅葉のちるをよめる
みつね

風吹けば落つるもみぢば水きよみ

らぬかげさへそこにみえつゝ
亭子院の御屏風のゑにかはわたら
むとする人のもみぢのちる木のもとに
むまをひかへてたてるをよませ
たまひけれはつかうまつりける
立とまりみてをわたらん紅葉は
雨とふるとも水はまさらし
これさだのみこの家の歌合に
　　　　　ただみね
山田もる秋のかりほにおく露は
いなおほせ鳥のなみだなりけり
　題しらず　　よみ人しらず
ほにも出ぬ山田をもるとふぢ衣
いなばの露にぬれぬ日ぞなき
かれる田におふるひつちのほに出ぬは
よを今さらに秋はてぬとか
北山に僧正遍昭とたけがりに
まかりてよめる
　　　　素性法師
紅葉は袖にこきいれてもて出なむ

秋はかきりとみむ人のため

寛平御時ふるきうたたてまつれと
おほせられけれはたつた川
もみちはなかるといふ歌を
かきてそのおなし心をよめりける

おきかせ

み山よりおちくる水の色みてそ
秋はかきりとおもひしりぬる

秋のはつる心をたつた川に思ひやりて
よめる

つらゆき

としことにもみちはなかす龍田川
みなとや秋のとまりなるらむ

なか月のつこもりの日大井にて
よめる

夕月夜をくらの山になくしかの
こゑのうちにや秋はくるらむ

おなしつこもりの日よめる

みつね

みちしらはたつねもゆかむもみちはを
ぬさとたむけて秋はいにけり

古今和歌集巻第六

冬哥

題しらす　よみ人しらす

龍田川錦おりかく神な月
しくれの雨をたてぬきにして

冬の哥とてよめる

源宗于朝臣

山里は冬そさひしさまさりける
人めも草もかれぬとおもへは

題しらす　よみ人しらす

大空の月のひかりしきよけれは
影見し水そまつこほりける

夕されは衣手さむしみよしのの
吉野の山にみ雪ふるらし

今よりはつきてふらなむわか宿の
すすきおしなみふれる白雪

ふる雪はかつそけぬらし足引の
山のたきつせ音まさるなり
この川にもみちはなかる奥山の
雪けの水そ今まさるらし
ふるさとはよしのの山しちかけれは
ひと日もみ雪ふらぬ日はなし
我宿は雪ふりしきて道もなし
ふみわけてとふ人しなけれは
冬の歌とてよめる
紀貫之
雪ふれは冬こもりせる草も木も
春にしられぬ花そさきける
志賀の山越にてよめる
紀秋岑
白雪の所もわかすふりしけは
いはほにもさく花とこそ見れ
ならの京にまかれりける時に屋
とれりける所にてよめる
坂上是則
みよしのの山の白雪つもるらし

ふるさとさむくなりまさるなり

寛平御時きさいの宮の歌合の歌

藤原おきかせ

浦ちかくふりくる雪は白波の
末の松山こすかとそ見る

壬生忠岑

みよしのゝ山の白雪ふみわけて
入にし人のおとつれもせぬ
白雪の降て積れる山里は
すむ人さへや思ひきゆらむ

雪の降けるを見てよめる

凡河内躬恒

雪ふりて人もかよはぬ道なれや
跡はかもなく思ひきゆらむ

雪の降けるをよみける

清原ふかやふ

冬なからそらより花のちりくるは
雲のあなたは春にやあるらん

雪の木に降かゝれるをよめる

紀つらゆき

冬こもりおもひかけぬを木の間から
花とみるまて雪そふりける
やまとの国にまかれりける時
ゆきのふりけるをみてよめる
坂上これのり
あさほらけ有明の月と見るまてに
よしのゝさとにふれる白雪
題しらす
よみ人しらす
けぬかうへに又もふりしけ春霞
たちなはみ雪まれにこそ見め

梅の花それとも見えすひさかたの
あまきる雪のなへてふれゝは
この歌はある人のいはく柿本人丸か也
梅の花に雪のふれるをよめる
小野たかむらの朝臣
花の色は雪にましりて見えすとも
かをたにゝほへ人のしるへく
雪のうちの梅の花をよめる
きのつらゆき
梅のかのふりおける雪にうつりせは

たれかことゝわきてをらまし

雪乃ふりけるをよめる

紀とものり

雪ふれは木ことに花そさきにける
いつれを梅とわきてをらまし

物へまかりける人を待て志はすの
つこもりによめる

みつね

我またぬとしはきぬれと冬草の
かれにし人はおとつれもせす

としのはてによめる

在原もとかた

あらたまの年のおはりになることに
雪もわか身もふりまさりつゝ

寛平御時きさいの宮の歌合の哥

よみ人しらす

雪ふりて年のくれぬる時にこそ
つゐにもみちぬ松も見えけれ

としのはてによめる

はるみちのつらき

きのふといひけふとくらしてあすか川
なかれてはやき月日なりけり
歌たてまつれと仰られし時よみて
たてまつれる
紀貫之
ゆく年のをしくもあるかなますかゝみ
みる影さへにくれぬとおもへは

古今和歌集巻第七
賀哥
題しらす　　よみ人しらす
我君は千世にやちよにさゝれ石の
いはほとなりて苔のむすまて
わたつ海の濱の真砂をかそへつゝ
君か千とせのありかすにせむ
しほの山さしての礒にすむ千鳥
君か御代をはやちよとそなく
我よはひ君かやちよにとりそへて

とゝめおきてはおもひいてにせよ

仁和の御時僧正遍昭に七十の
賀たまひける時の御歌

かくしつゝとにもかくにもなからへて
君かやちよにあふよしもかな

仁和のみかとみこにおはしましける時
御をはのやそちの賀にしろかねを
つゑにつくれりけるをみてかの御をはに
かはりてよみける
僧正遍昭

ちはやふる神やきりけむつくからに
ちとせのさかもこえぬへらなり

ほり河のおほいまうちきみの四十の賀
九条の家にてしける時
よめる
在原業平朝臣

桜花ちりかひくもれおいらくの
こむといふなる道まかふかに

さたときのみこのをはのよそちの
賀を大井にてしける日
よめる
これをか

亀乃尾の山乃岩ねをとめておつる
たき乃志ら玉千世のかずかも
さだやすのみこのきさいの宮乃
五十乃賀たてまつりける御屏風
にさくら乃花のちるしたに人の花
見たるかたかけるをよめる
藤原乃おきかぜ
徒にすごす月日はおもほえで
花見てくらす春ぞすくなき
もとやすのみこの七十乃賀の
うしろ乃屏風によみてかきける
貫之
春くれば宿にまづさく梅の花
君が千とせのかざしとぞ見る
素性法師
いにしへにありきあらずはしらねども
ちとせのためし君にはじめむ
ふしておもひおきてかぞふる万世は
神ぞしるらむわが君のため
藤原三善が六十賀によみける

左京太夫顕輔

霧のみてこの世の後をしるべにわが心をむかへてむ

この歌は内裏の屏風の絵に
ところどころかくれたる

にしきをみてかかれてある

北面法師

万代をまもりわたる君が代にはを
この世のうちにたてまつりおもへ
内裏のうへの右大将藤原朝臣の

千かへしかる河に花香のうつりけ
からうたの屏風にかきたるにさくら
かきてあるをおりつつみるあはれの
いろの心を歌にそえてとむ
山ふかみ雲井にかかるさくら花
心のゆくへもおもひやるらむ

夏

ゆくへしらぬ鶯のなくこゑ
こころのうちにおもひそめにし

秋

住乃江の松に秋風ふくからに
声うちそふるおきつしらなみ
ちはやふるさ河の川霧立わたり
山の木の葉も色まさりゆく
秋くれと色もかはらぬときは山
よその紅葉を風そかしける

冬

白雪のふりしく時はみよしのゝ
山した風に花そちりける
春宮のむまれ給へりける時
まいりてよめる
典侍藤原因香朝臣
峯たかき春日の山にいつる日は
くもる時なくてらすへらなり

古今和歌集巻第八

離別哥

題しらす　　在原行平朝臣

立わかれいなはの山の峰におふる
まつとしきかは今かへりこむ

よみ人しらす

すかるなく秋の萩原朝たちて
たひゆく人をいつとかまたむ
かきりなき雲ゐのよそにわかるとも
人を心におくらさむやは

をのゝちふるかみちのくのすけにま
かりける時にはゝのよめる

たらちねのおやのまもりとあひそふる
心はかりはせきなとゝめそ

さたときのみこの家にて藤原の
きよふかあふみのすけにまかりける
時にむまのはなむけしける夜
よめる　　きのとしさた

けふわかれあすはあふみとおもへとも
よやふけぬらむ袖の露けき

こしへまかりける人によみてつかはしける
かへる山ありとはきけと春霞
たちわかれなは恋しかるへし
人のむまのはなむけにてよめる
きのつらゆき
をしむから恋しき物を白雲の
たちなむのちはなに心ちせむ
ともたちの人の国へまかりけるに
よめる
在原滋春
別ては程をへたつと思へはや
かつ見なからにかねて恋しき
あつまの方へまかりける人によみ
てつかはしける　いかこのあつゆき
おもへとも身をしわけねはめに見えぬ
心を君にたくへてそやる
あふさかにて人をわかれける時に
よめる
なにはのよろつを
相坂の関しまさしき物ならは
あかすわかるゝ君をとゝめよ
題しらす
よみ人しらす

かゝる夜を何日ふるさとのあさ露の
おきそへしゆきもあれ一夜のみの花
こゝのえにある人流さは給ひて
わかし花みにはかりしへてみ
なる人をもそへてそこはあるもしたしき
とふらいへるなる時はとしもかくも
いそてよみく流れけりしそける
そらへ雨かゝる時は萩原風にそ
しるよみくく流れけりしそける

露

あさましきまてふみつかひ君をしのひけれ
おもひそめしかぬる節徒なり
こそれもねさゝかあはれに人なる
時は人の家に座してあるものさい
てそ徒けるまかりしそれぬる
女のよみくくいひせりそける

よみ人もし

えふしゝ成ゝ心みにいちあれは
秋やまのすゝへやとにねかし
あれしゝて待てる人の來ゝ

ゆかりあるをおくるとてよめる
ふかやふ
雲ゐにもかよふ心のおくれねは
わかると人にみゆはかりなり
とものあつまへまかりける時によめる
よしみねのひてをか
白雲のこなたかなたに立わかれ
心をぬさとくたくたひかな
みちのくへまかりける人によみて
つかはしける
つらゆき
白雲のやへにかさなるをちにても
おもはむ人に心へたつな
人をわかれける時によみける
別てふことは色にもあらなくに
心にしみてわひしかるらむ
あひしれりける人のこしの国に
まかりて年へて京にまうてきて
又かへりける時によめる
凡河内みつね
かへる山なにそはありてあるかひは

こそもとめなかにいれてまされ
こしの國へまかりける人によみてつかはしける
みつね
よそにのみこひやわたらむしら山の
ゆきみるへくもあらぬわかみは
おとはの山のほとりにて人をわかるとて
よめる　　　　つらゆき
おとは山こたかくなきてほとゝきす
君かわかれをゝしむへらなり
藤原ののちかけからものゝ
つかひになか月のつこもりかたに
まかりけるにうへのをのことも
さけたうひけるついてによめる
藤原かねもち
もろともになきてとゝめよきりきりす
秋の別はおしくやはあらぬ
平もとのり
秋きりのともに立出てわかれなは
はれぬおもひにこひやわたらむ
源のさねかつくしへゆあみむとて

ゆあみむとて山さきにてわかれ
おしみける所にてよめる

しろめ

命たに心にかなふものならは
何かわかれのかなしからまし

山さきより神なひのもりまて
をくりに人〃まかりてかへりかて
にしての別をおしみけるによめる

源さね

人やりの道ならなくにおほかたは
いきうしといひていさかへりなむ

今はこれよりかへりねとさねかいひ
けるおりによめる

藤原かねもち

したはれてこし心の身にしあれは
かへるさまにはみちもしられす

藤原のこれをかゝむさしのすけに
まかりける時におくりにあふさかを
こゆとてよみける

つらゆき

かつこえて別もゆくかあふさかは

[illegible]
おほえのちふるかこしへまかりける
むまのはなむけによめる

藤原兼輔

君かゆくこしの白山しらねとも
ゆきのまにまにあとはたつねむ

人の花山にまうてきて
ゆふさりつかたかへりなむとしける時に
よめる

僧正遍昭

夕暮のまかきは山とみえななむ
よるはこえしとやとりとるへく

山にのほりてかへりまうてきて人々
わかれけるついてによめる

幽仙法師

別をは山のさくらにまかせてん
とめむとめしは花のまにまに

うりむ院のみこの舎利会に
山にのほりてかへりけるにさくらの
花のもとにてよめる

僧正遍昭

山風に桜吹まきみだれなん
花のまぎれに立とまるべく

幽仙法師

ことならば君とまるべくにほはなん
かへすは花のうきにやはあらぬ

仁和のみかどみこにおはしましける
時にふるのたき御らんじにおはしまして
かへりたまひけるに
よめる

兼芸法師

あかずして別るる涙滝にそふ
水まさるとやしもはみるらん

かんなりのつぼにめしたりける日
はおほみきなどたうべて雨の
いたくふりければ夕さりまで侍りて
まかりいでけるおりにさかづきをとりて

つらゆき

秋はぎの花をば雨にぬらせども
君をばましておしとこそおもへ

とよめりけるかへし

兼覧王

おしむらん人のこゝろをしらぬまに
秋の志くれと身そふりにける
かねみのおほきみにはしめて物かたりして
わかれける時によめる
みつね
別るれとうれしくもあるかこよひより
あひ見ぬさきになにをこひまし
題しらす　讀人しらす
あかすして別るゝ袖の白玉を
君かかたみとつゝみてそゆく

限なくおもふ涙にそほちぬる
袖はかはかしあはん日まてに
かきくらしことはふらなむ春雨に
ぬれきぬきせて君をとゝめむ
しゐて行人をとゝめむさくら花
いつれを道とまよふまてちれ
志かの山こえにていしゐのもとにて
ものいひける人のわかれける折に
よめる　つらゆき
むすふ手の雫ににこる山の井の

みちにて人にまかりあへりけるに
色よりあひたる人のくるまに
ものいひつきて別ける所にて
よめる　　とものり
したの帯のみちはかたかたわかるとも
ゆきめくりてもあはむとそおもふ

古今和歌集巻第九

羇旅歌

もろこしにて月を見てよみける
安倍仲麿
あまの原ふりさけみれはかすかなる
みかさの山に出し月かも
このうたはむかしなかまろを
もろこしにものならはしにつかはし
たりけるにあまたのとしをへて
えかへりまうてこさりけるを此国より

又流れひまりいつくりて
流れてきたりしそてにつく
めいしよといふ家のうちにかの
国の人もまのあたりしまへに
流なりて月のいておりつゝ
こいつくる里にかりぬめりけ
語りかしこつ流れ
おなじの国よりきたれる物つ語り
乃りて出でゆきて京なる人の
りけ流かりし事も

小野たかむら朝臣

むさしの原の中に流るゝすみだ河
かんはせをわかれの流れ和
をいはつゝて　ともへふる
みやこ出てふるかみのいはれ川
川をこえしかとせ山
ならひわたりのかる胡蝶
流れかゝる手をそてふり
このもかうるへのいく樹木
わかれの時を人にいう

ゆきいさなひくつかきたる所
国八橋といふ所にいたりぬ
その川のほとりに杜若いとおもしろく
咲きたりそれを見てある人の
かきつはたといふ五文字をくのかみ
にすゑて旅の心をよめと
いひけれはよめる

左京□草翁

から衣きつゝなれにしつましあれは
はる〳〵きぬる旅をしそおもふ

むさしの国としもつふさの国との
中にある角田川のほとりにいたり
て都のいと恋しうおほえけれはしはし
川のほとりにおりゐておもひやれは
かきりなくとほくもきにけるかなと
わひあへるにわたしもりはや舟に
のれ日もくれぬといひけれは
のりてわたらんとするにみな
人ものわひしくて
京におもふ人なきにしもあらす

ゆくをりしもしろき鳥のはしとあしと
あかき川のかみにあそびける京
にはみえぬ鳥なれは皆人しらす
わたしもりにとひけれは何鳥そととへ
はこれなむ都鳥といひけるを
きゝてよめる

名にしおはゝいさこととはむ都鳥
我おもふ人はありやなしやと

よめりけれは　舟こそりて
かへり行房をはなれて渡まかり
うちなきてそのうみをわたりける
はやふねある人男女ありける女の
国へまかりまかりてかく海をわたりて
となかりつかみまかりにけれは女ひとり
京へいつまかるなとにて房の房
かなしさそてしのひけるにみ
あはれのこゝろ京へまかりてくみて
なとてしのひける　おと
むかし房の房をはなちうらかなしさ
いはれ我のさらにひすまうむ

こしの国へまかりける時しら山を
見てよめる　みつね
消はつる時しなけれはこしちなる
白山の名は雪にそありける
あつまへまかりける時道にてよめる
つらゆき
いとによる物ならなくにわかれちの
心ほそくもおもほゆるかな
かひの国へまかりける時みちにて
よめる　みつね
よをさむみをく初霜をはらひつゝ
草の枕にあまたゝひねぬ
たしまの国のゆへまかりける時
に二見のうらといふ所にとまりて
夕さりのかれいひたうへけるに
ともにありける人〳〵のうたよみける
ついてによめる
藤原かねすけ
夕月夜おほつかなきを玉くしけ
二見のうらはあけてこそみめ

らねつめ見えねともにほひけり
なかはわかのかはにしのこるか
かうらにおかりぬくさえけなれ
たゝくすみえこえなれまてくるら
あくわまぬかりまいるとの恋は
にはくさの月はさたとひまなれ
よめる
左京大夫顕輔
かつらしそなかはし流れにかゝらん
天川原に秋をきにけり
みこけにやとゝめてみえ流遊

えせなかりけるにかくれたるになかれける
こゝのわけをしね
ひとつせにてもひとつまた君まてそ
風とかへ人もわかれにそおもふ
朱雀院の前におりまして侍
さくらをおもふらんとよめる
よしのり朝臣
さめそめし花のかにおもへ
りみちのうしな神の中にく
素性法師

たむけにはつゝりの袖もきるへきに
紅葉にあける神やかへさむ

古今和歌集巻第十

物名

うくひす　　　　藤原としゆきの朝臣

心から花のしつくにそほちつゝ
うくひすとのみとりのなくらん

ほとゝきす

くへきほとゝきすきぬれやまちわひて
鳴なる声の人をとよむる

うつせみ　　　　在原しけはる

浪のうつせみれはたまそみたれける
ひろはゝ袖にはかなからんや

かへし　　　　壬生忠岑

たもとよりはなれてたまをつゝまめや
これなむそれとうつせみんかし

う梅　　　　よみ人しらす

あなうめにつねなるへくもみえぬかな
こひしかるへきかはにほひつゝ
かにはさくら　　　つらゆき
かつけともなみのなかにはさくられて
風ふくことにうきしつむ玉
すもゝ
今いくか春しなけれはうくひすも
ものはなかめておもふへらなり
からもゝの花　　　深養父
あふからもものはなほこそかなしけれ
わかれんことをかねておもへは
たちはな　　　をのゝしけかけ
足引の山たちはなれゆくくもの
やとりさためぬ世にこそありけれ
をかたまの木　　　とものり
みよしのゝよしのゝ瀧にうかひ出る
あはをかたまのきゆとみつらむ
やまかきの木　　　よみ人しらす
秋はきぬいまやまかきのきりきりす
よなよななかむ風のさむさに

あふひ　かつら

かくはかりあふひのまれになる人を
いかゝつらしとおもはさるへき

人めゆゑのちにあふひのはるけくは
わかつらきにやおもひなさまし

くたに　僧正遍昭

ちりぬれはのちはあくたになる花を
おもひしらすもまとふてふかな

さうひ　つらゆき

我はけさうひにそ見つる花の色を
あたなるものといふへかりけり

をみなへし　とものり

白露を玉にぬくとやさゝかにの
花にも葉にもいとをみなへし

朝露をわけそほちつゝ花見むと
今そ野山をみなへしりぬる

朱雀院のをみなへしあはせの時に
をみなへしといふいつもしを
くのかしらにおきてよめる

つらゆき

をくら山にねそよらかのしほかの
つまもしれすもしるへうかれ
くらかりの花　　やかもちのつと
あきはきのはなふるまゝに白露の
なとける草まかきにさくやつゆのゆく
しかはよ　　よみ人しらす
ゆふくれいさゝゐるこゑの花かも
うはらのかりのはなうひよする
つまろしの花　　ともなりと
秋風の花かちしみそさそひたる

ちるなかれわかこのしくしもとゐる
むられ　　讀人しらすて
わかともそのむかしふりぬれはやはゝの
まかくるはしらやかりけりそん
またこう　　風くの君實
うれはまにしくやむ花のなかれも
やとくな白露のそめしゆくかりもと
二條の后春宮のみやすん所と申と
御屏風にたつた川にもみちなかれたるかた
をかけりけるを題にてよめる

文屋やすひて

花の木にあらさらめとも咲にけり
ふりにしこのみなる時もかな

志のふくさ　　きのとしさた

山たかみつねに嵐の吹さとは
にほひもあへす花そちりける

やまし　　平あつゆき

ほとゝきす峯の雲にやましりにし
ありとはきけとみるよしもなき

からはき　　よみ人しらす

うつせみのからは木ことにとゝむれと
玉のゆくへをみぬそかなしき

かはなくさ　　ふかやふ

うはたまの夢になにかはなくさまむ
うつゝにたにもあかぬ心を

さかりこけ　　たかむこのとしはる

花の色はたゝひとさかりこけれとも
かへすかへすそ露はそめける

にかたけ　　しけはる

いのちとて露をたのむにかたけれは

りのちひとつに峰乃一のむしく
こゝは冬け　うきよの露み
はまのふくかゝ露をきゆる冬の又
月吹く山せあきの山にせ
見るひ
喜せい法師
煙そらうすにたえぬ夢の秋
みそれゝきらゝひく名付鶴まむ
さくまりひいゝを世秋く
きみの松の上
いろ秋は時まのまにそひとへ移る

心を世秋く人はみえし法る
なりかたれて人にあれ
無染
あ秋すりなきぬ物流れてを秋に
いひく秋をちはらそねのかう
かりしとくいるふれ春のちへ空る
日よ秋る
安倍清納昭
波のそこのもときかりめと心さ夜は
春風うく屋のうそ雨りん
いろさ秋
菊暖書

かちにあたる浪のしつくを春なれは
いかゝさきちる花とみゆらん
からさき　あほのつねみ
かのかたにいつからさきにわたりけむ
なみちはあとものこらさりけり
伊勢
浪の花おきからさきてちりくめり
水の春とは風やなるらむ
かみやかは　つらゆき
うはたまのわかくろかみやかはるらむ
かゝみのかけにふれるしら雪
よとかは
足引の山へにおれはしら雲の
いかにせよとかはるゝときなき
かたの　たゝみね
夏草のうへはしけれるぬま水の
ゆくかたのなきわか心かな
桂のみや　源ほとこす
秋くれと月のかつらのみやはなる
ひかりを花とちらすはかりを

百和香

しりんひとは

花とにほひしこそ紛れね

いくそつくりことかはりつゝ

よしみなりけり

志貴皇子

春はきしかくしのうちかうせみ

秋くるとやうさこそつけゆるもの

色なき人

けやりのか

かれは流るゝ花をもみちの川

あはれひにやそこはたゆきせん

らもれ

大江の里

のちまちのをくれかゝるかなかれ

わかれんみねそのときそく

すみつゝ火傷をとて[illegible]

をうきとくはの神の火とくの

いひれにしみえりつゝ

僧正聖寳

それのかゝ火よわくやそれの世の

心ちあよちらぬへなる

古今和歌集巻第十一

恋哥一

題しらす　　　よみ人しらす

ほとゝきす鳴やさ月のあやめ草
あやめもしらぬこひもする哉

素性法師

音にのみきくのしら露よるはおきて
ひるはおもひにあへすけぬへし

紀貫之

よしの川岩なみたかくゆく水の
はやくそ人をおもひそめてし

藤原勝臣

白浪のあとなきかたにゆくふねも
風そたよりのしるへなりける

在原元方

音羽山をとにきゝつゝあふさかの
関のこなたにとしをふる哉
立帰りあはれとそおもふよそにても
人に心をおきつしらなみ

つらゆき

世中はかくこそ有けれ吹風の
めに見ぬ人も恋しかりけり
右近のしやうはるのひさしの日はい
みそかなる人の夜のことをしれ
こゝめのぬめかのつれみをしき
しもく流しけるとて
左京のかみの君
みそきわか流れてもせぬへの恋しくは
わかすみやかにやみぬへきかは
返し　しらん人恋しきて
左清かるは何にかへてやゆるとて
おりゐるゆめにおもふけれ
かもそのゝ木川つにはつれなきと
かなたら出て都へゆきける女のりくに家
かへてうつしつゝ流しけるとてよめる
みつね
春日のゝ雪もかはりてわかれはや
年のうちにゆふへぬる君かて
人の花けしき雨ふりて
そこなる人の上にさしよりて

ちりし花を見て

落花

山さくら霞のまよりわけのほと
みえしハ人のこゝろなりけれ
[illegible]いはふをて　りとかく
みるほとハわかもぬれぬ袂かな
心ひく花くもるなり[illegible]

凡河内躬恒

鶯の[illegible]にこそ[illegible]
中空にみえし花のちりかへるかな

落花

春雨の雲井にふりけるかな
あたにこそ花はちりけれ

よみ人しらす

こゝろあるものにあらなくに[illegible]
わかれゆく花を雨のなみたせむ
夕暮の雲のはたてに[illegible]
あけぬるかきり[illegible]
[illegible]のおもひ[illegible]秋の
[illegible]やへ[illegible]花ちらる

つれもなき人をやねたく白露の
おくとはなけきぬとはしのはむ
千早振かもの社のゆふたすき
ひと日も君をかけぬ日はなし
我恋はむなしき空にみちぬらし
おもひやれとも行かたもなし
するかなる田子の浦なみたゝぬ日は
あれとも君をこひぬ日はなし
夕月夜さすや岡への松の葉の
いつともわかぬ恋もするかな

足引乃山下水のこかくれて
たきつ心をせきそかねつる
吉野川岩きりとほし行水の
音にはたてし恋はしぬとも
瀧津瀬の中にもよとはありてふを
なと我恋のふちせともなき
山たかみしたゆく水の下にのみ
なかれてこひむ恋はしぬとも
おもひ出るときはの山の岩つゝし
いはねはこそあれ恋しきものを

人しれすおもへはくるしくれなゐの
末つむ花の色にいてなむ
秋の野の尾花にましりさく花の
色にや恋ひむあふよしをなみ
我そのの梅のほつえにうくひすの
音になきぬへき恋もするかな
あしひきの山ほとゝきすわかことや
君にこひつゝいねかてにする
夏なれはやとにふすふるかやり火の
いつまてわか身したもえをせむ

恋せしとみたらし川にせし禊
神はうけすそなりにけらしも
哀てふことたになくは何をかは
恋のみたれのつかねをにせむ
おもふには忍ふることそまけにける
色には出しとおもひしものを
我恋を人しるらめやしきたへの
枕のみこそしらはしるらめ
あさちふの小野の篠原しのふれと
あまりてなとか人のこひしき

人しれぬおもひやすらんあしのはの
まちかねしわかれし風さき
おりからのもしあらいすの浜や
ゆふしもそゆくくるわひも
いく秋を人なしら泛ておほ宮の
ゆきのすゑにほりのおりの浦
伊勢の海よ鳴たる蜑のうきなれ
心ひとつをさへ泛ぬ浮浪
此世の海乃なかの浪のにかけつく
しほしのふやおもひわたるむ

淀川ならぬ水上をそへの浦さん
ねおりし河の見えける
そをわたり浪も猶ちゞに
忘とらひらあはこそ泛居は
釣舟のそれ川霧の宿よ乃も
うきくおりひのあさまかり
よそすもはしるきれいかはの
おりひとこゑく浪と乃さそふ
唐衣日もゆきふかなるかれ
うもくそくかうしひしき

よろつは松ことくめんとくとすへし
いにしへよき歌をみてまなふへし
其ことは念をつくりのあはれ
ちかはやまとことはそへてくらへきよ
人の身となりけりのちあはれて
いさ心さしこひやまれかこし
思ふ人生ひては物うき也は人のさまは
おりふしのてしはよそこし
らむよにはのあはすむそのあはれ
法まなり其人の心しるへし

法まなる其人の心とあらはれの
こと心をもてなすにはおほせ
能水よかうそくにしもしてあはれ
おもかけ人の心さしおもふよりおもふかすあり
人のおもひ人の心は物あはれ猶
身は物の中にしも心はあはれかはらむ
おりてひとまさらむことはそのあはれ
まこと蔵路よおもふ人のうへ
歌の中よりひとしき趣を法
らうせいしひろく猶その方あるへし

恋し給ひしよしさふらひし山の
これにてしに家よみし侍く
深川積るゝうも給ひ侍
夢もさらに見しにまきまき
恋しきれ秋月ゐうもとかるまてら
こりてへまそいわりのゆへ
わらはゆゑあらね我身のあやしく
深の川よりさくのあらむ
わするひのみなとまるみのひきいわ
されく中まものかかり

あひせまえうれおひせんば我身の
するこの川まよりつきもの色
おもひしこそねまりのるゑをは
ことれくのこやゑひころすむ
わりのさりくへ月のゆくるすの
こつとやへをかくこのしとは
人恋まねおりひを常にふ病るる
物のゆもれ我身まるされ
みやこの舟もこころねの
かれ心をへまうもうむ

あきさめのゆふくれまさる秋ふく
人やなしき猶のこ峰つゝむ
色深乃嵐にちるゝ涙つゝの
いろそ心におもひしれとも
うき世の中のうつろ蔵まさる闇の夜の
晴れ心をもてる人のなかりき
身佗ておりしん家の山ひとめ
うらみぬ山のおくにいとゝおり入
心のとそるゆめのかよひはひとへ
ゆるしきれとも人はまちせん

うきふしはしられなくてまちまよひの
おもふ心はいさしらしとして也
まつそれてなき消る夜の詞のかく
君か心の秋てりいかに待むなし
おとみそてなきせめのおもひ侘ぬ
しのふるかひさめのゆくへしられ
夜雪のしたいふるまゝなかれもし
ひとつのうちゝむらて旅衣かな
冬されはいつものれ秋のそてかり
枯乃露をしらぬれそかりけり

いはてしも恋しき物をいはねとも
秋の夕くれあやしかりけり
秋の田乃かよふ心に人を恋ぬる
かりかね心よ恋しとせん
秋の田のおくてのうへにおきてつる稲葉の
ひかりのまふて袖やしほらん
人しれす袖か秋にはあやなき花とちるらん
かりかねよ出て恋にもあらん
をく霜のをきまれしたくてよくら荻
秋やおりしめの恋ましくかるらん
をくら山のかきのとかゆる霜の
まねくとはいむしもの恋のましるよ

古今和歌集巻第十二

恋哥二

題しらす　　小野小町

おもひつゝぬれはや人のみえつらん
夢としりせはさめさらましを

うたゝねに恋しき人をみてしより
夢てふ物はたのみそめてき

いとせめて恋しき時はむはたまの
よるの衣をかへしてそきる

素性法師

秋風の身にさむけれはつれもなく
人をそたのむくるゝよことに

しもついつもてらに人のわさしける
日しんせい法師のたうしにて
いへりける事をうたによみて
をの小町かもとにつかはせりける

あへのきよゆきの朝臣

つゝめとも袖にたまらぬ白玉は
人をみぬめの涙なりけり

かへし

こまち

をろかなる涙そ袖に玉はなす
我はせきあへすたきつせなれは

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

藤原としゆき朝臣

恋ひわひてうちぬる中に行かよふ
夢のたゝちはうつゝならなむ
住乃江のきしによる浪よるさへや
夢のかよひち人めよくらむ

小野よしき

我恋はみ山かくれの草なれや
しけさまされとしる人のなき

紀とものり

よひのまもはかなくみゆる夏虫に
まとひまされる恋もするかな
夕されは蛍よりけにもゆれとも
ひかりみねはや人のつれなき
さゝの葉にをく霜よりも独ぬる
我衣手そさえまさりける
我やとの菊のかきねにをく霜の
消かへりてそ恋しかりける

川のせになひくたまものみかくれて
人にしられぬこひもするかな

たゞみね

かきくらしふる白雪のしたきえに
消て物おもふころにもあるかな

藤原おきかぜ

君こふる涙のとこにみちぬれは
みをつくしとそ我はなりける
しぬる命いきもやすると心みに
玉のをはかりあはんといはなん
わひぬれはしゐて忘れんとおもへとも
夢といふものそ人たのめなる

よみ人しらず

わりなくもねてもさめても恋しきか
心をいつちやらは忘れん
恋しきにわひてたましひまとひなは
むなしきからの名にやのこらん

紀貫之

君こふる涙しなくは唐衣
むねのあたりは色もえなまし

よとゝもに
なかれてそゆくなみた川
ふゆもこほらぬみなわなりけり
夢路にも露やおくらむ夜もすから
かよへる袖のひちてかはかぬ
素性法師
はかなくて夢にも人をみつる夜は
あしたの床そおきうかりける
藤原忠行
偽の涙なりせはからころも
しのひに袖はしほらさらまし
大江千里
ねになきてひちにしかとも春雨に
ぬれにし袖ととはゝこたへん
藤原敏行
我ことくものやかなしきほとゝきす
時そともなくよたゝなくらむ
紀貫之
さ月山梢をたかみほとゝきす
なくねそらなる恋もするかな

凡河内みつね

秋霧のはるゝ時なき心には
たちゐのそらもおもほえなくに

清原ふかやふ

虫のことこゑにたてゝはなかねとも
涙のみこそしたになかるれ

これさたのみこの家の歌合

讀人しらす

秋なれは山とよむまてなく志かに
我おとらめやひとりぬるよは

題しらす　貫之

秋の野にみたれてさける花の色の
ちくさに物をおもふころかな

みつね

独して物おもへは秋の田の
いなはのそよといふ人のなさ

ふかやふ

人をおもふ心はかりにあらねとも
雲井にのみもなきわたるかな

たゝみね

桃花はみおほはゐのこゝろさく
こゝろく人の恋しかるらむ
流る桜花
吹とかる滝のさゝ水不あ嵐は
常ならぬにまかせてん我らひ
風まかせて行らん人は流れゆきまる
山たかみ芳野の山のさくら花
人流らよそに吹きこもらむ
風にひかれりのあをひかる
人のゆくにみへまさりてせきこ

ちとせまで續く流れゆきまで
霧たつ心をあはれと花をちく
風吹にはなおりひく流く
そいはつきを 浦上にあれ
我恋る梅の山のさくら花
まあらくちるをしらなるまでに
山桜花の露
冬川のうつるふかくる我なれや
色々にはなくくにひをちくらむ
久まらね

冬かれのゝへにまかしとみえぬ梅か
えたなる雪そまたのこりける

とものり

しらくもにねさしてわたる[illegible]
うちとけておもひわかねは河のせはすゝし

東路のさやの中山なかなかに
何しか人をおもひそめけむ

志きしまの松のしたにうちまたれ
人をとゝみるわすれあひそめまする
としをへてこゝろねかひしかりける

しゐのかけりしは物[illegible]かりまた

清[illegible]

我おもふ人はわれ山路よりこゝよ
ゆくへも心しらぬかりける
秋の野に出けるなかの[illegible]
みかきもりたれたを色まさりける
白雲とみえしは梅の[illegible]
うすら流るゝ[illegible]

みつね

夜半[illegible]

秋もなかはよりくれぬつくなり

みちとね

風吹はあまりし雨のあとの雲の
みちえて清きる光君かみよ
月影よ我身をしらぬよりのかけ
清きる光へも哀しやらむ

ゆき庭の

忘れなん空の君かみちしよ世の
常なき光ゆくいひる事は

母貞之

清乃四の難波のあしの風たえに
志ま光秋ふひ人志すゆや
てりえて月日つまるまる志隠
おほゆめ仰ら事て拝れね
人志れねおもひのまゝにけふ志
秋頭にて秋乃まゝ仰

としのき

あくに出ていくねてみなせ川
おにうとひとなつきるめと

み清孫

君をのみおもひねにねし夢なれは
わか心から見つるなりけり
たゝみね
命にもまさりておしくあるものは
みはてぬ夢のさむるなりけり
はるみちのつらき
梓弓ひけはもとすゑわかかたに
よるこそまされ恋のこゝろは
みつね
我恋はゆくゑもしらすはてもなし
あふをかきりとおもふはかりそ
我のみそかなしかりけるひこほしも
あはてすくせる年しなけれは
ふかやふ
今ははやこひしなましをあひ見むと
たのめしことそ命なりける
みつね
たのめつゝあはて年ふるいつはりに
こりぬ心を人はしらなむ
とものり

命やはなにそは露のあたものを
あふにしかへはをしからなくに

古今和歌集巻第十三

恋哥三

やよひのついたちよりしのひに
人にものいひてのちに雨のそほふり
けるによみてつかはしける

在原業平朝臣

おきもせすねもせてよるをあかしては
はるのものとてなかめくらしつ

業平朝臣の家に侍ける女の
もとによみてつかはしける

としゆきの朝臣

つれ〳〵のなかめにまさる涙川
袖のみぬれてあふよしもなし

かの女にかはりて返しによめる

なりひらの朝臣

あさみこそ袖はひつらめ涙川
身さへなかるときかはたのまむ
なりひらの朝臣　よみ人しらす
よるへなみ身をこそとほくへたてつれ
心は君かかけとなりにき
徒にゆきてはきぬるものゆへに
みまくほしさにいさなはれつゝ
あはぬ夜のふる白雪とつもりなは
我さへともにけぬへきものを
このうたはある人のいはく柿本人丸かなり

秋の野にさゝわけしあさの袖よりも
あはてこしよそひちまさりける
なりひらの朝臣
みるめなき我身をうらとしらねはや
かれなてあまのあしたゆくくる
小野小町
あはすしてこよひあけなは春の日の
なかくや人をつらしとおもはむ
源宗于朝臣
みふのたゝみね

有明のつれなくみえし別より
あかつきはかりうきものはなし

ありはらのもとかた

あふことのなきさにしよる浪なれは
うらみてのみそたちかへりける

よみ人しらす

かねてより風にさきたつ浪なれや
あふことなきにまたきたつらむ

たゝみね

陸奥にありといふなる名とり川
なき名とりてはくるしかりけり

みはるのありすけ

あやなくてまたきなき名の立田川
わたらてやまむものならなくに

もとかた

人はいさ我はなき名のおしけれは
むかしも今もしらすとをいはむ

よみ人しらす

こりすまに又もなき名はたちぬへし
人にくからぬよにしすまへは

ひんかしの家にかくれ侍りけるを
これ囚るかわしのふうふ思ひる所
からうたれかくらりしとえいつく
かきの人の侍らるかへりにひろう城
かきこゆるをまれたるまうしこそ侍れて
よのなかにはくれ人をまちて侍よ
りはきいてさそはれえむまかと
うつゝとこゝろ見ぬまゝ風をまる
からのみの繼
人もこれわれ我かしひらのせしけるを

しかしくうらくし繼すらむ
名をいふつけて 侍りける
おもひ出てまつさ時にあへひとつめ
山ふかみの出かくれなれ
讀人しらす
忘れてもおもはぬひとつのあはさめ
夕暮をまつるか侍るあるらむ
よみ人しらす
秋のよしなかの花のかるらからむ
しられさるうつゝわかれめの色

凡河内みつね
なかしともおもひそはてぬむかしより
あふ人からの秋のよなれは
よみ人しらす
志のゝめのほからゝゝと明ゆけは
をのかきぬゝゝなるそかなしき
藤原国経朝臣
明ぬとて今はの心つくからに
なといひしらぬおもひそふらん
寛平御時きさいの宮の哥合に
としゆきの朝臣
明ぬとてかへる道にはこきたれて
雨も涙もふりそほちつゝ
題しらす　寵
志のゝめの別をおしみ我そまつ
とりよりさきになきはしめつる
よみ人しらす
ほとゝきす夢かうつゝか朝露の
おきてわかれしあかつきのこゑ
玉くしけあけは君かなたちぬへみ

夜ふかくこしを人みけむかも
大江千里
けさはしもおきけむかたもしらさりつ
おもひいつるそきえてかなしき
人にあひてあしたによみてつかはし
ける　業平朝臣
ねぬる夜の夢をはかなみまとろめは
いやはかなにもなりまさるかな
業平朝臣の伊勢の国にまかりたりける
時斎宮なりける人にいと
みそかにあひてまたのあしたに人
やるすへなくておもひをりける
あひたに女のもとよりおこせたる
ける　よみ人しらす
君やこし我やゆきけむおもほえす
夢かうつゝかねてかさめてか
かへし　なりひらの朝臣
かきくらす心のやみにまよひにき
夢うつゝとはよ人さためよ
題しらす　よみ人しらす

ひとよめの風にめくりかさなかゝる
夢はいくへもかさなりかくる
河よりこえのさかゆく月影は
わかれし春とおもひみ侍るかな
春の名も秋の名もそめて難波かた
こゝろしいつかあはれとやおもふ
なかる川せの浪の本おもかけ
いくせともあはてそなれぬらむ
吉野川の花の心をやくみても
みよしのゝ春は侍らてはなのみ

忘らるゝ身はつらくおもひそはゆく
猶ものゝこゝろにいはて花に泪

ものゝあはせ

花ゆへに花そ出にしいのちをも
おゆかりのむなしきおもひのわか
さかりの花のさかりをおしまぬ
あひみぬよしもゆかしさに
こゝろの〈ある〉　續人のもとに
おもふこゝろをしらせてかく
そのまゝにつらくゆかしき我をしも

返し　なりひらの朝臣

浅みこそ袖はひつらめ涙川
身さへなかると聞かはたのまん

といへりけれは　この男

いといたうめてゝいまゝてまきて
文はこに入てありとなんいふ
なる人にあひかきのつとめて

雨のふりけるに人のもとに

かへりてよみてつかはしける

おりつゝも人にあはぬ身のかなしきは
川とみえつゝなかれてぞゆく

またいせのまにかなしかりける
人にあはてのせみなんいひける

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

こさのゝみやう

わか身こそあらぬ身となり行く人は
あふことかたみなくしぬへき

よみ人しらす

みなれたるきしのむかしの名残のはてには

そこにかしこの人のしらさるな
ことの葉よそへて物思の姿をも
しみるほとくしらすはいくたひや
しらひとは
山さとの春のやまのはにかへらん
人のこゝろくはつらきひとえらるも
山ふかき人のあれのうちにもなし
やよは
こてまつの風
しらさりのかけれとさるさかにかあ
みるさんのうちにかはらさりけれ

平貞文

白川のしらすともいはしそこきよみ
なかれてよゝにすまむとおもへは
としゆき
わにゆきこそ花ちりてけり山のはの
ゆくへしれすも人なとかえて
我らひとまちひのわくならす逢ひの
山さとらぬるのもにつくなし
しらん人きつれ
たくらは秋もみなとらんにはしなむ

ふかくこそ人にみるめをなくさめて

平貞文

梅よりもまさる人となかれはなひを
なくさせれおつゝのしはるかに

よみ人しらす

風吹くるみへいとしのまゝなれは
秋はわくれとなかぬつるかな
こめ花いはるへのやくかひなれは

人丸なるらし

池にすむ名をゝし鳥の水をあさみ
かくるとすれとあらはれにけり
わすとる画の色いろ名の色
しかは川のそこはいせのしと
村雨のそらにみかさなしと見よ
しるしなしとふくしわくなみや
春たちて我名を藤ふまかさし
かくも山に立みちよそゝ

伊勢

春いつく梅にほせく猿かめを
ひろわれ花の色よそゆかしむ

古今和歌集巻第十四

恋歌四

題しらす　　　　　読人しらす

陸奥のあさかのぬまの花かつみ
かつみる人にこひやわたらむ

あひみすは恋しき事もなからまし
音にそ人をきくへかりける

　　　　　　　　　つらゆき

いそのかみふるの中道なかなかに
みすは恋しとおもはましやは

　　　　　　　　　藤原忠行

君といへはみまれみすまれふしのねの
めつらしけなくもゆる我恋

　　　　　　　　　伊勢

夢にたにみゆとはみえしあさなあさな
わか面影にはつる身なれは

　　　　　　　　　よみ人しらす

石間ゆく水の白浪たちかへり
かくこそはみめあかすもあるかな

伊勢の海のあまの釣縄うちはへて

みるめに人をあくよしもかな

とものり

春霞たなひく山のさくら花
みれともあかぬ君にもあるかな

深養父

心をそわりなき物とおもひぬる
みるものからやこひしかるへき

凡河内みつね

かれはてん後をはしらて夏草の
ふかくも人のおもほゆるかな

よみ人しらす

あすか川ふちは瀬になる世なりとも
おもひそめてん人はわすれし

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

おもふてふ事の葉のみや秋をへて
色もかはらぬものにはあるらん

よみ人しらす

さむしろに衣かたしきこよひもや
我をまつらんうちのはしひめ
又はうちのたまひめ

春ならむ秋やゆかしのいさよひは
まちぬるいくとせ待ちね覚らむ
北世以清亭
今こむといひしはかりに長月の
有明の月を待出つる哉
ゑん念つきて
月影しよしやゆく人の告風は
こそつよふかき雨にしつれとて
君に逢初めていつもしらしな
我りとゆひ侍るみてぬらしも

立よりあへる小之秋露と
風をまちしと春かけまて
わか袖をもてしる山の
忘わすれける風まにかそこ
津の国のなにおかしなの
こよひのむしよいのことを
清秋元
故郷の風まつりわか恋の
うつもつらくてわかれの行也
妙風

ゑしらぬ若竹をむすびとめん
ちぬとそてみてしかはいかへしとる
しらん志つを
みどりお花ふ乃人乃旅するみの
なるにおもひつ秋こひ見えも
かくこひ人わかき我もおひすゑき
心のうちをもうちしらうもとる
て乃原ゆくいろつかなる跡も
おもみ中たへさくらりのん
捨てしひとの情こらよ忘れなよ

我おりの人のしられ志やをとらん
こゝのあはわかるゝ人あはせのみちをあふゑ
うら紙はつ添ひてるとなむいれ
夜川のてひとの年のかへて
こしをくしいみえとしみとおもふ字
いひちは返ししまらしかなくなりた
なむ
思人のこひ夜乃は志つまちなと
うれゆく春はあはさ見え屋ひ
旅居の旅の路は旅のかたりひとの

朝臣の家なりける女をあひしりて
文つかはせりけることはに今まう
てくる雨のふりけるをなむ見わつらひ
侍るといへりけるをきゝてかの女にかはり
てよめりける　在原業平朝臣
かす／＼におもひおもはすとひかたみ
身をしる雨はふりそまされる
ある女の業平朝臣をところ
さためすありきすとおもひてよみ
てつかはしける　よみ人しらす

おほぬさのひくてあまたになりぬれは
おもへとえこそたのまさりけれ
返し　なりひら朝臣
おほぬさと名にこそたてれなかれても
つゐによるせはありてふものを
題しらす　よみ人しらす
すまのあまの塩やく煙風をいたみ
おもはぬかたにたなひきにけり
玉かつらはふ木あまたになりぬれは
たえぬ心のうれしけもなし

たか里によかれをしてかほとゝきす
たゝこゝにしもねたるこゑする
いて人はことのみそよき月草の
うつし心は色ことにして
偽のなき世なりせはいかはかり
人のことのはうれしからまし
いつはりとおもふものからいまさらに
たかまことをかわれはたのまむ
素性法師
秋風に山の木の葉のうつろへは
人のこゝろもいかゝとそおもふ
寛平御時きさいの宮の歌合
とものり
蝉の声きけはかなしな夏衣
うすくや人のならむとおもへは
よみ人しらす
空蝉のよの人ことのしけゝれは
忘れぬもののかれぬへらなり
あかてこそおもはむ中ははなれなめ
そをたにのちの忘れかたみに

忘れなむとおもふ心のつくからに
ありしよりけにまづぞこひしき

忘るらむ我をうらむなほとゝぎす
人の秋にはあはむともせず

たえずゆくあすかの川のよどみなば
心あるとや人のおもはむ

此哥はある人のいはくなかとみのあづ
ま人がうたなり

淀川のよどむと人は見るらめど
ながれてふかき心あるものを

素性法師

そこひなき淵やはさわぐ山川の
あさき瀬にこそあだなみはたて

よみ人しらず

くれなゐのはつ花ぞめの色ふかく
おもひし心我忘れめや

河原大臣

みちのくのしのぶもぢずり誰ゆゑに
みだれ初し我ならなくに

よみ人しらず

おもふよりいかにせよとか秋風に
なひくあさちの色ことになる
ちゝの色にうつろふらめとしらなくに
心し秋のもみちならねは
　　　　　　小野小町
あまのすむ里のしるへにあらなくに
うらみむとのみ人のいふらむ
　　　　　　しもつけのをむね
くもり日の影としなれる我なれは
めにこそ見えね身をははなれす
　　　　　　つらゆき
色もなき心を人にそめしより
うつろはむとはおもほえなくに
　　　　　　読人しらす
めつらしき人を見むとやしかもせぬ
我下ひものとけわたるらむ
かけろふのそれかあらぬか春雨の
ふる日となれは袖そぬれぬる
堀江こくたなゝしを舟こきかへり
おなし人にやこひわたりなむ

伊勢

なにはかたみしかきあしのふしのまも

あはてこのよをすくしてよとや

元良親王

わひぬれはいまはたおなしなにはなる

みをつくしてもあはむとそおもふ

人を[illegible]

[illegible]の家[illegible]

[illegible]

[illegible]

大伴くろぬし

おもひ出てこひしき時ははつかりの

なきてわたると人しるらめや

[illegible]君[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

藤原興風

その[illegible]の葉[illegible]

[illegible]

近院右大臣

今はとて返すことの葉ひろひおきて
おのかものから形見とや見む

たいしらす　因香朝臣

玉ほこの道は常にもまとはなむ
人をとふとも我かとおもはむ

よみ人しらす

まてといはゝねてもゆかなむしひて行
駒のあしおれまへのたなはし

中納言源のほるの朝臣の
あふみのすけに侍ける時よみてや
れりける　閑院

相坂の夕つけとりにあらはこそ
君かゆきゝをなくなくもみめ

たいしらす　伊勢

ふるさとにあらぬものから我ために
人の心のあれてみゆらん

寵

山かつのかきほにはへるあをつゝら
人はくれともことつてもなし

さうけ人ひとね

ちるはなは恋しき人の形見には
ねかりやしにかへらぬらん

しる人のもとへ

あるまての形見とも我なくせよ
こえし心のうつくしさよ
かやのまろまろ人の山を路は
いさのひとあひてはのいひける
わひにかやのうついひきれた
うらしとてむかしもおなしなく

いつはまとろみの後は我つとてん
らんける　　　返し歌

年まての形見とこそ見しけれ
涙よりぬれてくつすらん

又いまつくる　しる人のもとへ

形見こそ今はあたなれこれなくは
忘るゝ時もあらましものを

古今和歌集巻第十五

恋歌五

五条のきさいの宮のにしのたいに
すみける人にほいにはあらてものいひ
わたりけるをむ月の十日あまりになむ
ほかへかくれにけるありところはきゝけれと
えものもいはて又のとしのはる
むめの花さかりに月のおもしろかりける
よこそをこひてかのにしのたいにいきて
月のかたふくまて

あはらなるいたしきにふせりて
よめる　　　　在原業平朝臣

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
わか身ひとつはもとの身にして

題しらす　　　藤原なかひらの朝臣

花すゝきわれこそしたにおもひしか
ほにいてゝ人にむすはれにけり

藤原かねすけの朝臣

よそにのみきかましものをおとは川
わたるとなしにみなれそめけむ

凡河内みつね

我ことく我をおもはむ人もかな
さてもやうきと世を心みむ

もとかた

久かたのあまつ空にもすまなくに
人はよそにそおもふへらなる

よみ人しらす

見てもまたまたも見まくのほしけれは
なるゝを人はいとふへらなり

きのとものり

雲もなくなきたるあさの我なれや
いとはれてのみ世をはへぬらん

よみ人しらす

花かたみめならふ人のあまたあれは
忘られぬらん数ならぬ身は

うきめのみおひてなかるゝ浦なれは
かりにのみこそあまはよるらめ

伊勢

あひにあひて物おもふころの我袖に
やとる月さへぬるゝかほなる

讀人志らす

秋すきて冬の白露結ほれて

秋の梢のちりくすなり

花の色のかはの濁風衣おなし

色と妙わかきや君かさ色さね

山深の瀧のしらいとかり深に

らわ人のこそむ秋そくすれ

あひそねる恋すれ色さみ世川

なかの色ゝ絶ておりてそ絶えむ

暁の別のさわかれりてそれ

君かため秋ゝこそ沢らく

おもう今はたれともかく風の

わすれし人の此くさ深ん

秋風よきくれ月の神のねるか

君からうち杜やさねん

山乃井れあられ心さおかりねよ

うきいつるのとへのられさん

忘草をねともし松かさの

いとかうられやとさつせん

こゝろにもおもへのかわれこ三ゆき

夏路はこくやおもひしらするらむ
夏にこそあふとかつらぬ物ゆへ
秋やいそぎね人の身にすらむ
きむけい清し
りうこしく夏にしもはちりぬるを
おもはぬ中にそあるけりまする
さこうのかう
ひとつのと織女や乃住まゐれ
人をおもへの夢のそれおもひかける
僧正遍昭

秋風には名さそふ紅葉ちれあをなくら
清きうら人を御ともせりまに
とらむといひて別し朝より
おりひらしの霧を乃すう
うん人へまて
たゝめやこはおもふわらひそへの
なくゝ夕それそうまされ清
見まことなひしもかはうの
夜は打ちおもひかけての宿
今わうしおりのおもひなす清

またるゝことのまたもやまぬか
月夜にはこぬ人またるかきくもり
あめもふらなむわひつゝもねむ
うゑていにし秋田かるまて見えこねは
けさはつかりのねにそなきぬる
こぬ人をまつゆふくれの秋風は
いかにふけはかわひしかるらん
ひさしくもなりにけるかなすみのえの
まつはくるしきものにそありける
かねみのおほきみ
すみのえの松ほとひさになりぬれは
あしたつのねになかぬ日はなし
なかひらの朝臣あひしりて侍ける
をかれかたになりにけれはちゝか
やまとのかみに侍けるもとへまかる
とてよみてつかはしける
伊勢
みわの山いかにまちみむとしふとも
たつぬる人もあらしとおもへは
雲林院のみこ
ふきまよふ

吹まよふ野風をさむみ秋萩の
うつりもゆくか人の心の
をのゝこまち
今はとて我身時雨にふりぬれは
ことのはさへにうつろひにけり
返し　小野さたき
人をおもふ心このはにあらはこそ
風のまにまにちりもみたれめ
なりひらの朝臣きのありつねか
むすめにすみけるをうらむる事ありて
しはしのあひたひるは
きてゆふさりはかへりのみしけれは
よみてつかはしける
あま雲のよそにも人のなりゆくか
さすかにめにはみゆるものから
返し　なりひらの朝臣
ゆきかへりそらにのみしてふる事は
我ゐる山の風はやみなり
題しらす　かけのりのおほきみ
唐衣なれは身にこそまつはれめ

まつ人のやすらふなとおもひ
　　ゆふくれ
秋風の身にしみてしかなしきは
人の心のあきはならひ(?)ん
　　源宗于朝臣
流れてはいつかたへのこゝろ
秋よりさきのちりにける
うらちそこなる浮(?)
て待まつ人のこゝろにそ
みすて後にへにつまれ

あらく流れけり(?)
　　貫之(?)
志賀の山ことにさえて(?)ゆふ(?)
流れきる(?)ものとしもなくて
あひ思はぬ人の為にや
われとはなるあはなき(?)
みなもの葉に見えて
流れてゆくもとにあね
川せ(?)の岸にそ(?)のあかうない
今日の日のかなしまる

ねかひくらしつるの山まうた
なにかゝるのりえつらをかは
よむなる

伊勢

ふるされのやまへて袖かけておもひ
いてゝしまはしぬまきりめと
そてにしつると
あさ浪の消しくら絶ものをみ
かれもよわりそのまゝなれ

よみ人しらす

みな世川ありて行水なくはこそ
つひにわか身をたえぬとおもはめ

みつね

しの人はしやへとほるなる
やゝひとつしと思ひおもへし

よみ人しらす

世中の人の心は花そめの
うつろひやすき色にそありける
心こそうたてにくけれそめさらは
うつろふこともおしからましや

小町

色みえてうつろふ物は世中の
人の心の花にそありける
よみ人しらす
我乃みや世をうくひすとなきわひん
人の心乃花とちりなは
素性法師
おもふともかれなむ人をいかゝせむ
あかすちりぬる花とこそみめ
よみ人しらす
今はとて君かかれなは我宿の
花をはひとりみてやしのはん
むねゆきの朝臣
忘草かれもやするとつれもなき
人の心にしもはをかなむ
寛平御時御屏風に歌かゝせ
給ひける時よみてかきける
そせい法し
忘草何をかたねとおもひしは
つれなき人の心なりけり
そていまつりて

秋の田のいねてふこともかけなくに
なにをうしとか人のかるらむ
きのつらゆき
初雁の鳴こそわたれ世中の
人の心のあきしうけれは
よみ人しらす
あはれともうしとも物を思ふ時
なとかなみたのいとなかるらん
身をうしとおもふにきえぬものなれは
かくてもへぬる世にこそありけれ

典侍藤原直子朝臣
あまのかるもにすむ虫のわれからと
ねをこそなかめ世をはうらみし
いなは
あひ見ぬもうきもわか身のから衣
おもひしらすもとくるひもかな
寛平御時きさいの宮の歌合の
すかのたゝおむ
つれなきを今はこひしとおもへとも
心よわくもおつるなみたか

題しらす　　伊勢

人しれす絶なましかはわひつゝも
なき名そとたにいはまし物を

よみ人しらす

それをたにおもふこととてわかやとを
みきとないひそ人のきかくに

あふことのもはらたえぬる時にこそ
人の恋しきこともしりけれ

わひはつる時さへ物のかなしきは
いつこをしのふなみたなるらん

藤原おきかせ

うらみてもなきてもいはむかたそなき
かゝみにみゆるかけならすして

よみ人しらす

ゆふされは人なきとこをうちはらひ
なけかむためとなれるわかみか

わたつみのわか身こすなみたちかへり
あまのすむてふうらみつるかな

あらを田をあらすきかへしかへしても
人の心をみてこそやまめ

ありそうみの浜のまさこと頼めしは
わするゝことのかすにそ有ける
あしへより雲井をさして行雁の
いやとをさかる我身かなしも
しくれつゝもみつるよりも言の葉の
心の秋にあふそわひしき
秋風の吹と吹ぬる武さしのは
なへて草葉の色かはりゆく

小町

秋風にあふたのみこそかなしけれ
我身むなしくなりぬとおもへは

平さた文

秋風の吹うら返すくすの葉の
うらみても猶うらめしき哉

讀人しらす

秋といへはよそに聞しあた人の
我をふるせる名にこそ有けれ
忘らるゝ身をうち橋の中たえて
人もかよはぬ年そへにける
うきなからけぬるあはともなりななむなかれてとたに

坂上是則

あふ事をなからのはしのなからへて
こひわたるまにとしそへにける

とものり

うきなからけぬるあわともなりななん
なかれてとたにたのまれぬ身は

よみ人しらず

なかれてはいもせの山のなかにおつる
よしのの川のよしや世の中

古今和歌集巻第十六

哀傷歌

いもうとの身まかりける時よみける

小野篁朝臣

なく涙雨とふらなんわたり川
水まさりなはかへりくるかに

さきのおほきおほいまうちきみを
白川のあたりにおくりける夜よめる

素性法師

ちの涙おちてそたきつ白川は

君か世まての名にこそありけれ
ほりかはのおほきおほいまうちきみ
身まかりにける時に深草の
山にをさめてける後によみける
　僧都勝延
空蝉はからをみつゝもなくさめつ
ふかくさの山けふりたにたて
　かむつけのみねを
深草の野への桜し心あらは
ことしはかりはすみ染にさけ

藤原敏行朝臣の身まかりにける
時によみてかの家につかはしける
　きのとものり
ねてもみゆねてもみえけりおほかたは
空蝉の世そ夢にはありける
あひしれりける人の身まかりにけれは
　きのつらゆき
夢とこそいふへかりけれ世中に
うつゝある物とおもひけるかな
あひしれりける人の身まかりにける

よまれけるによめる

よみ人しらず

わするかはよみてかへるやあふさかの
こゝろは世々は尽とはみえて
わかれの身のうきにまかするはまある
世にとけて関にぬるしにしきる
別をしらむしうらみそすれ
あふさかのそゝらむしかあはさる
て行末人の身のうきにまかする
はる春のゆくにかくしてよめる

閑院

いにしへのなかのやうにもおもほえは
わかれし水のふるきわかる
こゝろのうちにみえるにきける
とよみける　　法師
あふさかの関をのへにわかれしもあかね
わかるゝ人をたのむはかなしかりけれ
よみ人しらね
はるはあふさかやまのわかれの
ありなみにわすれさりめと

しらかおりひかれよみける

九條内大臣

神無月は雲まぬしくれみちくく
そらはかひくのそらはしくるら
しくらおりひかれよみける

よみ人しらす

落葉いはれくもやるまひくの
みやこの山のたとえなきまる
おりひに待まるのおちまへ
まつりまるみられよみける

待恋

秋露のおくての山田かくれなよ
しれ世中をおりひれたるまね
おりひに待まるかなとこをひて
ゆうてよみける

よみ人しらす

しみ深の君かまちりし雲路
そらはたみてこの雨とかを梅を
めのおやのおりひかれ山てるな
待まるえとわらへのよるる

つかはせりければ返事によみける
よみ人しらず
足引の山へに今はすみぞめの
衣の袖はひる時もなし
諒闇の年池のほとりの花を
見てよみける　たかむらの朝臣
水のおもにしづく花の色さやかにも
君がみかげのおもほゆるかな
深草のみかどの御国忌の日よみける
文屋やすひで
草ふかき霞の谷に影かくし
てる日のくれしけふにやはあらぬ
深草のみかどの御時に蔵人の
頭にてよるひるなれ
つかうまつりける諒闇になりにければさらに
世にもまじらずしてひえの山に
のぼりてかしらおろしてけり
そのまたのとしみな人御ぶくぬぎて
あるはかうぶりたまはりなど
よろこびけるをききてよみける

僧正遍昭

みな人は花の衣になりぬなり
こけのたもとよかはきたにせよ

河原の左のおほいまうちきみの身
まかりての秋かの家のほとりを
まかりけるにもみちの色また
ふかくもならさりけるを見て
かの家によみていれたりける

近院の右のおほいまうちきみ

うちつけにさひしくもあるかもみち葉も
ぬしなき宿は色なかりけり

藤原のたかつねの朝臣の身
まかりての又の年の夏郭公
の鳴けるをききてよめる

紀つらゆき

郭公けさ鳴こゑにおとろけは君
をわかれしときにそありける

さくらをうへてありけるにやう
やく花さきぬへき時にかの
うへける人身まかりにけれは

その花を見てよめる
きのもちゆき
花よりも人こそあだになりにけれ
いづれをさきにこひんとかみし
あるじ身まかりにける人の家
の梅花を見てよめる
つらゆき
色も香もむかしのこさににほへども
うゑけん人のかげぞこひしき
河原のおほいまうちぎみの
身まかりて後かの家にまかりて
ありけるに塩竈といふ所の
さまをつくれりけるを見てよめる
君まさで煙たえにし塩竈の
うらさびしくも見えわたるかな
藤原のとしもとの朝臣の右近
中将にてすみ侍りける曹司の
身まかりて後人もすまずなりにけるを
秋の夜ふけて物より
まうできけるついでに見入れければ

まれなりとみちしせんさいつとも
けふあはせるかはさえてやく
そこに待かれもしなおの色
ゆくらんけり

みく原のおとゞ

君かへしてもしれ絵の
しまれ成くてよるまするか
られてゝのみこれちり絵ましも
はまたかわらんこしとこそ
なれなりしくそつせるわくな
うくてかくりまる

やよひ

ひとかたはこのこゝろへて消すとも
これは風のさそひまうら
そらにしるとも　あなへ
かれ人の空にかのうかしは
ゆきくるゆのとるや法とも
雅見もと花さけるらん白雲
そうのかとわくあふし地
式子のみこ周院の女房に
とゆらうまる地つくとく

あらて女みこの身まかりにける
時にかのみこのすみける帳の
かたひらのひもに文をゆひつけ
たりけるをとりてみれはむかしの
手にてこの哥をなむかきつけ
たりける

かすかすに我を忘れぬものならは
山の霞をあはれとはみよ

おとこの人の国にまかれりける
まに女にはかにやまひをして
いとよはくなりにける時よみおきて
身まかりにける

よみ人しらす

声をたにきかて別るゝ玉よりも
なき床にねん君そかなしき

やまひにわつらひ侍りける秋
心ちのたのもしけなくおほえけれは
よみて人のもとにつかはしける

大江千里

紅葉を風にまかせてみるよりも

ふるさとのゝ命はえすりける
身ゆるかゝせてよ絶る

藤原元真

霜をかれしあはれなれともおもひ
秋なしなのふかきなかりせは
やまひとつよつあゝまでる時
よ[illegible]る　かゝひの網

流れはゆく[illegible]はれ行[illegible]かゝ
鳴るかゝるはおもはするかは
ひとの関あひたまて待まする

人つてならていふよしもかな
するゝてふかく屋のひとて
いまはとてあまたのわれにしるへする
京にのりて母より伊勢を
ひとへのはしに待けるに

左京大夫道雅

かりそめのゆくへもしらぬひとを
今ふたゝひのちかひのあかゝり

古今和歌集巻第十七

雑哥上

題しらす　　読人しらす

我うへに露そをくなる天川
とわたる舟のかいのしつくか

おもふとち円居せる夜は唐にしき
たゝまくおしき物にそ有ける

うれしきを何につゝまむ唐衣
たもとゆたかにたてといはましを

限なき君か為にとおる花は
ときしもわかぬ物にそ有ける
　ある人のいはく此哥はさきのおほいまうちきみの也

紫のひともとゆへにむさし野の
草はみなからあはれとそみる

めのおとうとをもて侍ける人に
うへのきぬをおくるとてよみて
やりける　　なりひらの朝臣

紫の色こき時はめもはるに
野なる草木そわかれさりける

大納言藤原の国経の朝臣の

宰相より中納言になりける時
そめぬうへのきぬあやをおくる
とてよめる　近院の右のおほいまうちきみ
色なしと人や見るらむむかしより
ふかき心にそめてしものを
いそのかみのなみまつかみやつかへ
もせていそのかみといふ所にこもり
侍りけるをにはかにかうふりたまはれり
けれはよろこひいひつかはすとて
よみてつかはしける
ふるのいまみち
日のひかりやふしわかねはいその神
ふりにし里に花もさきけり
二條の后のまた春宮の
みやすん所と申しける時大原野に
まうてたまひける日よめる
なりひらの朝臣
大原や小塩の山もけふこそは
神世のことも思ひいつらめ
五節のまひひめを見てよめる

よしみねのむねさた
あまつかせ雲のかよひち吹とちよ
をとめのすかたしはしととめむ
五節のあしたにかんさしの玉の
おちたりけるを見てたかならむと
とふらひてよめる
河原左大臣
ぬしやたれとへと白玉いはなくに
さらはなへてやあはれとおもはむ
寛平御時うへのさふらひに侍ける

をのこともかめをもたせてきさい
の宮の御方におほみきのおろし
ときこえにたてまつりたりけるを
くら人ともわらひてかめをおまへ
にもていてゝともかくもいはすなり
にけれはつかひのかへりきてさなむ
ありつるといひけれはくら人のなかに
おくりける
敏行朝臣
玉たれのこかめやいつらこよろきの
いその浪わけおきに出にけり

めつらしきひかりをそふる

よしよし侍

かつらきやたかまの山の松まよれ
心ちよるみちはなりけむ
すみぬる人の家ゐせし
宿かはるあるしのこゝろをそ
こゝろもあはれたるつきてまつれ
しられける　こゝのをつり
蝉のこゑ何の衣にうつれそ
うつりかはらし白ひかりぬる

寄月といふ事を

續人忘つとて

おもひ出る月もわかる物思の
山のはにまよひてすむつきり
秋の心をたゝえうつろふや
なくさめて山にいてゝる月をこそ

あかひの輔

天の原月はみえそら花のえの
はなれぬのおもひとるまゝの
月かけりとて浪間船柁
まちてこゝろまちみよみける

この法橋

ゆふされはくもゐにみゆる月かけの
つきぬ里しもわかしおもて
いけよ月のみてや絶よかし
二夜ねやとおもひのまゝに
山のはなかれていはる月をと
みをいはつさて　よみ人しらす
天川雲のみをにてはやけれは
ひかりとゝめす月そなかるゝ
あかすして月のかくるゝ山もとは
あなたおもてそこひしかりける
これやこの見ゆるあかつきまちえて
せりて風もなくつきをはなれ
とよのあけのあとやまつらむ
ま十五日の月しかくれなむまし
おしみこそひくらのつらむ
こゝろやまれなつらん見ゆる
かつひ館
あかつきのまちえて月のかくるゝ
山の端にけて月しつきそ

西村のみやまの山時に般舟院僧正
わたらひのかたとなくるを
まちわひて般舟院をとふらひし
夜まうでとものとやまにかへらる
わま敬信
あかなくてとめし月しらなまし
雲かくせしもひかりけるは
名はいつもしられぬとても
いその神ふるきためしの跡かく
りとの心はたれわくらし

ゆくへつめ世中の清水わたさるれ
りみ心をとらるうへくらし
石の出川のふるきまたれとやそ
ひとしてうつろひわかれしやく
今これわき遊ひし山ふかきとよ
ふためてさてわかくしものにもよ
世中をかゆきめのらの池の国の
別くの橋としれとるをうそ
こ乃葉は浮つむ雪のみぬかむを
むくうてさまゆへさささうつし

おほわかれのゝちのかきおかれしもは
風にさそはれてゆくへもなし
　みちこふるわかこのおかけのかきおかし風
かくま雁は雨をあはれしらてくたれ
ちしてうやなふりのいとは風に浪
かくと絆ら老なることゝれ
みちなかきりのこりぬれは雨つよ
かいつくのこ山にさらぬ世にありて
うしとこそくてあはれまさりしと

ゆこゝのこりむかしかたりのかみ
わきかめのはゝかるとかむ
さら雨すくみしはしゆかすもさかむ
色つゝしひやうくにうつきし
いうしもねうしわかれかれ月を
宿あふさしてう津ゝね
いう染わつもて山てやうしゆそ気ある
ちつもつれなくしてくゝのしからひゝら
鏡山いさたちよりてみてゆかむ
としへぬる身はおいやしぬると

このうたはある人のいはく大伴のくろぬしか也

なりひらの朝臣のはゝのみこなかをかに
すみ侍りける時になりひら宮つかへ
すとて時々もえまかりとふらはす侍
りけれはしはすはかりにはゝのみこの
もとよりとみのことゝて文をもて
まうてきたりあけて見れはことは
はなくてありけるうた

おいぬれはさらぬわかれもありといへは
いよいよみまくほしき君かな

返し　　　　　　　なりひらの朝臣

世中にさらぬわかれのなくもかな
ちよもとなけく人のこのため

寛平御時きさいの宮の歌合のうた
　　　　　　　　ありはらのむねやな

白雪の八重ふりしけるかへる山
かへるかへるもおいにけるかな

おなし御時うへのさふらひにてをのこ
ともにおほみきたまひておほみ
あそひありけるついてにつかう

まつれる　　　　としゆきの朝臣

おいぬとてなとかわか身をせめきけむ
老すはけふにあはましものか

題しらす　　　　よみ人しらす

ちはやふるうちの橋もりなれをしそ
あはれとはおもふとしのへぬれは
我見てもひさしくなりぬ住の江の
きしのひめ松いくよへぬらん
住よしのきしのひめ松人ならは
いく世かへしとゝはましものを

梓弓いそへの小松たか世にか
万代かねてたねをまきけむ
　此うたはある人のいはく柿本人丸と
かくしつゝ世をやつくさむ高砂の
尾上にたてる松ならなくに
　　　　　　藤原興風
誰をかもしる人にせむ高砂の
松もむかしの友ならなくに
　　　　　　よみ人しらす
わたつ海のおきつしほあひにうかふ

こゑはりのかくしは侍りしかとも
とこいとうのかくしよせる鶴の
るみりてゆつるわくらは山
稲の葉にせとそあるみ浮ても
みまくのわりよ出侍りまかて
なおこそ遍みらつあまの秋
そらのつ浦る河畔けるる
侍り楽いつその関に住まる
御風をまくらにこそ聞て
こうくかんく流られまる

夜深みて梅さ
春はおりひかりの海に浮かるの
そらねをきつわたるさく
返し　侍り楽
おとろくなみのこゑ海のまゝ枕の
なにとそ春としもこゝろまつれ
なおうに海わかう何に従へる
難波のうつるふる玉りけうつくれぬ
あまとも秋くるうちねつゝるる
あはれ志わりまるへの住まゐて

住吉にまうてけるによめる

たゝみね

住吉とあまはつくともなかゐすな
人忘草おふといふなり

なにはにまかれりける時よめる

なにはかたおふるたまもを
かりそめのあまとそわれはなりぬへらなる

貫之

法皇西川におはしましたりける
日つるすにたてりといふことを題にて
よませたまひける

あしたつのたてる川へを吹風に
よせてかへらぬ浪かとそみる

中務のみこの家の池に舟を造て
おろしはしめてあそひける日法皇
御覧しにおはしましたりけり夕さり
つかたかへりおはしまさむとしける折に
水のうへにうかへる舟の君ならは
こゝそとまり

伊勢

水のうへにうかべる船の君ならば
こゝぞとまりといはましものを
からことゝいふ所にてよめる
真せい法師
都までひゞきかよへるからことは
浪のをすげて風ぞひきける
布引のたきにてよめる
在原行平朝臣
こきちらすたきのしら玉ひろひおきて
よのうきときのなみだにぞかる
布引の瀧のもとにて人〻あつ
まりて歌よみける時によめる
なりひらの朝臣
ぬきみだる人こそあるらし白玉の
まなくもちるかそでのせばきに
よしのゝたきを見てよめる
承均法師
たがためにひきてさらせる布なれや
世をへてみれどとる人もなき
題しらす
神たい法し

きよたきのせゝの白いとくりためて
山わけ衣おりてきましを
龍門にまうでゝ瀧のもとにてよめる
伊勢
たちぬはぬ衣きし人もなき物を
なに山姫の布さらすらむ
朱雀院の御門ぬのひきの瀧御らむ
ぜむとて文月の七日の日おはしま
してありける時にさぶらふ人々に
歌よませ給ひけるによめる
たちばなのながもり
ぬしなくてさらせる布を七夕に
我心とやけふはかさまし
比叡の山なる音羽の瀧を見て
よめる　たゞみね
おちたぎつ瀧のみなかみ年つもり
老にけらしなくろきすぢなし
おなじ瀧をよめる
みつね
風吹けど所もさらぬ白雲は

田むらの御時に女房のさふらひにて
御屏風の絵御覧しけるに滝
おちたりける所おもしろしこれを
題にて歌よめとさふらふ人に
おほせられけれはよめる

三条町

おもひせく心の中の滝なれや
おつとは見れとおとのきこえぬ

屏風の絵なる花をよめる

つらゆき

咲そめしときよりのちはうちはへて
世ははるなれやいろのつねなる

屏風の絵によみあはせてかきける

坂上これのり

かりてほす山田のいねのこきたれて
なきこそわたれ秋のうけれは

古今和歌集巻第十八

雑歌下

題しらす　よみ人しらす

世中は何か常なるあすか川昨日の淵そけふは瀬になる

いくよしもあらし我身をなそもかくあまのかるもに思ひみたるゝ

雁のくる峰の朝霧はれすのみ思ひつきせぬ世中のうさ

小野たかむらの朝臣

しかりとてそむかれなくに事しあれはまつなけかれぬあなう世中

かひのかみに侍ける時京へまかりのほりける人につかはしける

をのゝさたき

都人いかにと問はゝ山たかみはれぬ雲井にわふとこたへよ

文屋のやすひてみかはのそうになりて県見にはえいてたゝしやといひやれりける返事によめる

よめる

小野小町

侘ぬれは身をうき草の根をたえて
さそふ水あらはいなむとそおもふ

題しらす

あはれてふことこそうたて世中を
おもひはなれぬほたしなりけれ

よみ人しらす

あはれてふことの葉ことにおく露は
むかしをこふるなみたなりけり

世中のうきもつらきもつけなくに
まつしるものはなみたなりけり

世中は夢かうつゝかうつゝとも
夢ともしらすありてなけれは

よの中にいつら我身のありてなし
哀とやいはむあなうとやいはむ

山里は物のさひしき事こそあれ
世のうきよりはすみよかりけり

これたかのみこ

白雲のたえすたなひく峯にたに
すめはすみぬる世にこそありけれ

ふるのいまみち
しりにけむきゝてもいとへ世中は
なみのさはきに風そしくめる
そせい
いつくにか世をはいとはむ心こそ
野にも山にもまとふへらなれ
よみ人しらす
世中はむかしよりやはうかりけむ
我身ひとつのためになれるか
世中をいとふ山への草木とや
あなうの花の色に出にけむ
みよしのゝ山のあなたに宿もかな
世のうき時のかくれかにせむ
世にふれはうさこそまされみよしのゝ
いはのかけみちふみならしてん
いかならん巌の中にすまはかは
世のうき事のきこえこさらん
足曳の山のまに〳〵かくれなむ
うき世中はあるかひもなし
世中のうけくにあきぬおく山の

このこにつまることやあるまし
おなしもしなきうた
もののへのよしな
よのうきめみえぬ山路へいらんには
おもふ人こそほたしなりけれ
山のほうしのもとへつかはしける
凡河内躬恒
世をすてゝ山に入人山にても
なをうき時はいつちゆくらむ
ものおもひける時いときなき子をみてよめる
いまさらに何おひいつらん竹のこの
うきふししけき世とはしらすや
題しらす　よみ人しらす
よにふれはことの葉しけき呉竹の
うきふしことにうくひすそなく
木にもあらす草にもあらぬ竹のよの
はしにわか身はなりぬへらなり
ある人のいはく高つのみこの哥也
わか身からうき世中となつけつゝ
人のためさへかなしかるらむ

おきの国にながされて侍ける時に
よめる　　たかむらの朝臣
おもひきやひなのわかれにおとろへて
あまのなはたきいさりせむとは
田むらの御時に事にあたりてつの
くにのすまといふ所にこもり侍けるに
宮のうちに侍ける人につかはしける
人につかはしける
　　在原行平朝臣
わくらはにとふ人あらはすまのうらに
もしほたれつゝわふとこたへよ
左近将監とけて侍ける時に女の
とふらひにおこせたりける返事に
よみてつかはしける
　　をのゝはるかせ
あまひこのおとつれしとそ今はおもふ
我か人かと身をたとる世に
つかさとけて侍ける時よめる
　　平さたふん
うき世にはかとさせりとも見えなくに

なとかわか身のいてかてにする
ありはてぬ命まつまのほとはかり
うきことしけくおもはすもかな
みこの宮のたちはきに侍けるを
宮つかへつかうまつらすとて
とけて侍ける時によめる
みやちのきよき
つくはねのこのもとことにたちそよる
はるのみ山のかけをこひつゝ
時なりける人のにはかに時なくなり

てなけくをみてみつからの
なけきもなくよろこひもなき
ことをおもひてよめる
清原深養父
ひかりなき谷には春もよそなれは
さきてとくちるものおもひもなし
かつらに侍ける時に七条中宮
のとはせ給へりける御返事にそへて
まいらせける
伊勢
久かたの中におひたるさとなれは

ひろきあめのしたのめくみつくる
絶のしるしかあふみのさゝなみに
まつるまつるゆるしまのなみゆきを
せむそれはていひかくかはしを
ゆきかつらしこゝろあらはして
猶みつるまてみえさるまれは
流れつきぬる　なかひの跡
今こそしるく御こゝろねしくまこと
星のかけたえぬものへしりまほる
これこそのみちのはりにほまり

かしこまりかしこおろかにて
そのしるし示す猶まつこゝろ
ふかくそてまつりまつるなりけり
のちのゆきとちりまかれ雪ふと
ゆくつきかけちかくのしわよ
ゆくらいつちくおかみまよに
流むくしていくねそもりて
うつまうてさうつもとくくたと
くらまる
忘れくら夢なりとえはりのなかや

雪ふみわけて君をみむとは
深草の里にすみ侍りて京へまうて
くとてそこなりける人によみて
をくりける
年をへてすみこしさとを出ていなは
いとゝふか草野とやなりなむ
返し
野とならはうつらとなりて鳴をらん
かりにたにやは君はこさらん
とよいひつゝて
秋ことに君なにはつのうらにさくらん
うれしはぬかはのあまとゆき
このあしわたりぬおつともちよる
そこなる男このはするにまかせ
なにはのとはのてつよゆるされ
かくてよめくゝなくおことにさへなる
まつらしとむいへる
返し
なにはかたうらむへきまもおもほえす
いつはしかはのあまとこそなれ

ともすれはことつれなくとおもひしを
風のたよりにて聞せてへ
そもそらのそらしうめかてさら
なるりとはかなく流りしよる

御返し

すみのおもにおもふる月のかはるよの
うれしきわれはとくへてこね
人にしれつるひとしるあかもまつは
あひくみそれかよせる
身はこそゆきやまつはまもふかくさら

わかなりのあさこころわかなりさら
山なかのあまからかうしたは
てこころまよふ雪のうちまさは
こえなかのおもひからの雪みえて
なむ流れなるひまたおもふに
よせる
君をおもひし雪と流れのまたまたさ
まよひ後はあらしとおもひつて

返し　　宰相大弐

君はいかとおもひうちのまつらむ

いにしへは宮のうちなる時ある
うしやまふくをはにりてまゐる
これはかつはき
おもひ出るこしの白山たつねても
一夜も夢にこそねしらるれ
そゝいはつゝを
よみ人しらす
いさこゝに我世はへなんすかはらや
ふしみのさとのあれまくもおし
我庵はみわの山もとこひしくは
とふらひきませ杉たてるかと

きせん法し
我庵は都のたつみしかそすむ
世をうち山と人はいふなり
よみ人しらす
あれはてゝあはれいくよの宿なれや
すみけん人のおとつれもせぬ
かくれまゐる時はあれける
家のあるしのひきかへて
しみていれてまゐる
しまかのあまは

まひとつの住へき宿となかりせは
かきねにくもるさかの秋かせ
さりせは浮世にすむ友のなかりけり
宮こに風のかよふまて時をぬる

二條

人のよにすむもひとつにかはらぬを
あつのさやかしらぬかくれまち
名をはいとふも　こゝろ人ゝまて
世中はいかにまよひてもあらん
ゆれと風そ寄りて見とこそしる

冬深のわくの風さむしまれを
行末ちかくなりぬ流にもねる
風のつまよわりかさこえ秋の宵い
行末もさてをるかぬつゝるう
家をさらてよ知る

伊勢

あきの月ゆらさえあかぬ我やこそ
世にはかりゆく地ゆるまたる
流てよ絹の時は海くかれ
流るゝちまる人のりたまふ

こつまゐつてこそく流れゆきける
このいとゆう

ゆくとてもみしをあかしほのゝみ
くらし明石のうらによる
女いもうとのもとにつかはしける
須まに流されて侍りける みちにて
あきらけき鏡のかけもうつるらむ
秋まちしみのつらき心にそある
寛平御時きさいの宮
のうたあはせによめる 東宮

こゝろひとつをたのむともなく
なみ流してはらはん侍ける

藤原敏行
かよ行のかよかなしとはかりの
おもひわひぬるのちはおもひしられ
ましいはなくは あふ人もなし
風吹はおもひわつらふみなとにも
あまのもるやのひとりねやせん
ある人はいふ 大和国なる
人のむすめにあるおとこを

さるこの女親となくて家も
ころくかりおひたるのおく
かうちの関よ人をあひきて
かたひはらされ風よりあかう
ゆふつかたさかれとほとまゐる
まうさもみえてかうちへゆくに
男の心のとくかはりいて
風ふきれはあやしとおもひけり
なほまたしく心やすからひて
月のおもしろかりける夜ふけて

いつはりてせんさいのなかにかくれ
てみれは夜ふくるまてねさりけれは
かきならしつゝうち頭かきて
うちなかめて猶なかれたるを
ここにみえけるみつかふまつれは
めてたうみゆるにうちはいへてよる
みるかほ中にさとかこいかく夜
そなたの山によかけなんなく
りすまいんは思へしてたゝ歌をうたふ
ひとつはとにあひとゆけらむ

貞観の御時万葉集はいつはかりつくれるそととはせ給ひけれは
よみてたてまつりける

文屋ありすゑ

神な月時雨ふりおけるならのはの
なにおふ宮のふることそこれ

寛平御時哥たてまつりけるついてに
たてまつりける

大江千里

あしたつのひとりおくれてなくこゑは
雲のうへまてきこえつかなむ

藤原かちおむ

人しれすおもふ心は春霞
たち出て君かめにもみえなむ

哥めしける時にたてまつるとて
よみておくにかきつけてたてまつ
りける

伊勢

山川のをとにのみきくもゝしきを
身をはやなからみるよしもかな

古今和歌集巻第十九

雑躰

短哥

題しらす　　読人しらす

あふ事のまれなる色におもひそめわか身はつねに
あま雲のはるゝ時なく富士の嶺のもえつゝとはに
おもへともあふ事かたしなにしかも人をうらみむ
わたつみのおきをふかめておもひてし
おもひは今はいたつらになりぬへらなり
ゆく水のたゆる時なくかくなはに
おもひみたれてふる雪のけなはけぬへく
おもへともえふの身なれはなほやまぬ
おもひはふかしあしひきの山下水の
木かくれてたきつ心を誰にかも
あひかたらはむ色に出は人しりぬへみ
すみ染のゆふへになれはひとりゐて
あはれあはれとなけきあまりせむすへなみに
庭に出てたちやすらへは白妙の
衣の袖におく露のけなはけぬへく
おもへともなほなけかれぬ春霞

よしやとも人を　あはれとおもひて
ゆふこころすすしもいかにいつのりく
海士のそのおもかけ

海辺松

みるや浦　海のみるめを　見行の
せめてしほ見ゆ　あまひとの　吾妹の
老の浦見　おもひしを　有明の
なにしのはる　こまよふく　山のはに
ふるさとに　須磨の浦　うかきさ
ゆくいなのみ　よみちの　このかはを

海上月

たつ浦や　さくれくて　みえ夜の
磯ちかく　浦雲の　あかしの
いさよひに　明石の浦に　あはれなる
こぎ行く舟　寄る浪を　舞ひる
世の人の　おもひは　いつの月の
いそなみに　あはれにて　別るる
あまらかも　それを心も　風のまの
みちのくに　もしほの　おもせかな
もしほくの　中ゆく浪に　いせの海の
浦の浜ひ　日まの月影　とまりなき

さ夜の衣に見えし恋 おりひあへぬを
やみの夜の衣の そてのしつく たえまなき身を
人もこそ 見る雪の 流れてそ
ちつみやせね 月も風の 思ひ寝の夢
いそのかみ 梅か香の いりやまかせん
梅かえにくるつらきものはかなしき身をはせる
おもひしに

壬生忠岑

呉竹のよゝの梅さへ かはりせし
いにしへのいはひて おもふ心を
のこしおきし あとを忘れし あはさてふ

くもゐこそ かはれと 身をかへて おもふ
きみのためしに あはれふかくも あきよ
千とせのよまての あはれなる 今も昔の
よろつよを ちよのたまやら ちよの身に
流れてもしぬ こゝろかな 流れにおもふ
ちきりの 雲にわかれし 心して
ちよのすゑも おなしこゝろを ひとつ心に
かゝるとき かくれしも てるひかり
ちよのかみの 身はしらぬ さきたつ
まつとゝろに あさ山かけて みえにけり

このかりにあれ　みなかけれ　おきつしまも
おほえかたし　これかれの　かけかくも
嵐の世も　さゝさきちれ　今のゆくへ
ちりまかれ　君か世に　生きなひとれ
夜かはいせこ　鳴くらし　松か河辺に
それならし　ゑつの霧を　世とをしら
かけるよひきし　あるかくも　つれなる年と
ころせれし　いけの山川に　かけさそ
これまそかれる　ころころの　おいの深く
風にまかれ　あらいやくて　そをきれ

ちよの鶴は　かくし清く　かよれるの
かくいて　なみの浦に　さゝいたちの
かすみの音かや　お花も世に　さ深に余
おりまかれ　こいよ風の　ちいて山の
かりらさまでく　かくれも　をとこの跡の
高くはすく　おいてとをなる深の　人をちまか
君かやちよ　かはらし清きん
君か世は　あふさか山の　いはしみつ
こかくれたりと　おもひけるかな
ゑれあかくらし

凡河内躬恒

ちはやふる　神な月とや　けさよりは
くもりもあへす　うちしくれ　紅葉とゝもに
ふるさとの　よしのゝ山の　山あらしも
さむく日ことに　なりゆけは　玉のをとけて
こきちらし　あられみたれて　霜こほり
いやかたまれる　庭のおもに　むらむら見ゆる
冬くさの　うへにふりしく　白雪の
つもりつもりて　あらたまの　年をあまたも
すくしつるかな

七条の后うせ給ひにける
後によみける　伊勢

おきつなみ　あれのみまさる　宮のうちは
年へてすみし　いせのあまも　舟なかしたる
心ちして　よらんかたなく　かなしきに
涙の色の　くれなゐは　我らかなかの
時雨にて　秋のもみちと　人々は
をのかちりちり　わかれなは　たのむかけなく
なりはてゝ　とまるものとは　花すゝき
君なき庭に　むれたちて　空をまねかは

こゝろれ　かはつかりのなきわたりつゝよそにこそみめ

旋頭哥

　題しらす　　　　讀人しらす

うちわたすをちかた人にもの申すわれ
そのそこにしろくさけるはなにの花そも

返し

春されは野へにまつさく見れとあかぬ花
まひなしにたゝなのるへき花の名なれや

　題しらす

はつせ川ふるかはのへにふたもとあるすきとしをへて
またもあひ見むふたもとあるすき

　　　　　　　つらゆき

君かさすみかさの山のもみちはの色
神な月しくれの雨のそめるなりけり

誹諧哥

　題しらす　　　　讀人しらす

梅花みにこそきつれ鶯のひとくひとくと
いとひしもをる

　　　　　　　素性法師

山吹の花いろ衣ぬしやたれとへと

とへとこたへすくちなしにして

藤原敏行朝臣

いくはくの田をつくれはかほとゝきす
しての田をさをあさな〳〵よふ

七月六日たなはたの心をよみ
ける

藤原兼輔朝臣

いつしかとまたく心をはきにあけて
あまのかはらをけふやわたらむ

凡河内躬恒

むつこともまたつきなくに明ぬめり
いつらは秋のなかしてふよは

僧正遍昭

秋の野になまめきたてる女郎花
あなかしかまし花も一時

よみ人しらす

秋くれは野へにたはるゝ女郎花
いつれの人かつまてみるへき

秋霧のはれてくもれは女郎花
花のすかたそみえかくれする

花とみてをらんとすれは女郎花

うたゝあるさまの名にこそありけれ

寛平御時きさいの宮の歌合のうた

在原むねやな

秋風にほころひぬらし藤はかま
つゝりさせてふきり〳〵すなく

あすはるたゝむとしける日となりの
家のかたより風の雪を
ふきこしけるを見てそのとなりへ
よみてつかはしける

清原ふかやふ

冬なから春のとなりのちかけれは
中かきよりそ花はちりける

題しらす　よみ人しらす

石上ふりにし恋のかみさひて
たゝるに我はいそねかねつる

枕よりあとより恋のせめくれは
せむかたなみそとこなかにをる

恋しきかかたもかたこそありときけ
たてれをれともなき心ちかな

ありぬやとこゝろみかてらあひ見ねは

あひみねはたはふれにくきまてそこひしき
みゝなしの山のくちなしえてしかな
おもひのいろのしたそめにせむ
足引の山田のそほつおのれさへ
われをほしといふうれはしきこと
きのめのと
ふしのねのならぬおもひにもえはもえ
神たにけたぬむなしけふりを
きのありとも
あひみまくほしはかすなくありなから
人に月なみまとひこそすれ
小野小町
人にあはむ月のなきにはおもひおきて
むねはしり火に心やけをり
寛平御時きさいの宮の歌合のうた
藤原おきかせ
春かすみたなひくのへのわかなにも
なりみてしかな人もつむやと
たいしらす
よみ人しらす
おもへともなほうとまれぬ春かすみ

かゝらぬ山のあらしとおもへは

平貞文

春の野のしけき草葉の妻恋に
とひたつきしのほろゝとそなく

よしひと

秋のゝに妻なき鹿の年をへて
なそわかこひのかひよとそなく

みつね

蝉のはのひとへにうすき夏衣
なれはよりなむものにやはあらぬ

たゝみね

かくれぬのしたよりおふるねぬなはの
ねぬなはたてしくるないとひそ

よみ人しらす

ことならはおもはすとやはいひはてぬ
なそ世中乃玉たすきなる
思てふ人の心のくまことにたち
かくれつゝみるよしもかな
おもへともおもはすとのみいふなれは
いなやおもはしおもふかひなし

我をのみおもふといはゝあるへきを
いてや心はおほぬさにして

われをおもふ人をおもはぬ報ひにや
わかおもふ人の我をおもはぬ

一本ふかやふ

おもひけむ人をそともにおもはまし
まさしやむくひなかりけりやは

一本もとかた

出てゆかむ人をとゝめむよしなきに
となりのかたにはなもひぬかな

紅にそめし心もたのまれす
人をあくにはうつるてふなり

いとはるゝ我身ははるの駒なれや
のかひかてらにはなちすてつる

鶯のこその宿りのふるすとや
我には人のつれなかるらん

さかしらに夏は人まねさゝのはの
さやく霜夜をわかひとりぬる

平中興

あふことの今ははつかになりぬれは

夜ふかゝらては月なかりけり

左のおほいまうち君

もろこしのよしのゝ山にこもるとも
おくれんと思ふ我ならなくに

なかき

雲はれぬあさまの山のあさましや
人の心を見てこそやまめ

伊勢

難波なるなからのはしもつくるなり
今はわか身をなにゝたとへん

よみ人しらす

まめなれとなにそはよけくかるかやの
みたれてあれとあしけくもなし

おきかせ

何かその名のたつことのおしからん
しりてまとふは我ひとりかは

いとこなりける男によそへて人のいひけれは

くそ

よそなからわか身にいとのよるといへは
たゝいつはりにすくはかりなり

たいしらす　さぬき

ねきことをさのみきゝけむやしろこそ
はてはなけきのもりとなるらめ

大輔

なけきこる山としたかくなりぬれは
つらつゑのみそまつつかれける

よみ人しらす

なけきをはこりのみつみてあしひきの
山のかひなくなりぬへらなり

人こふることをおもにとになひもて
あふこなきこそわひしかりけれ

よひのまに出ていりぬるみか月の
われてものおもふころにもあるかな

そゑにとてとすれはかゝりかくすれは
あないひしらすあふさきるさに

世中のうきたひことに身をなけは
ふかき谷こそあさくなりなめ

在原もとかた

世中はいかにくるしとおもふらむ
こゝらの人にうらみらるれは

よみ人しらす

なにをして身のいたつらにおいぬらん
としのおもはむことそやさしき

おきかせ

身はすてつ心をたにもはふらさし
つゐにはいかゝなるとしるへく

千里

しら雪のともにわか身はふりぬれと
心はきえぬものにそありける

よみ人しらす

梅の花さきてのゝちの身なれはや
すきものとのみ人のいふらむ

法皇西川におはしましたりける日
さる山のかひにさけふといふ事を
題にてよませ給うける

みつね

わひしらにましらななきそあしひきの
山のかひあるけふにやはあらぬ

よみ人しらす

世をいとひこのもとことに立よりて

うつふしそめのあさのきぬなり

古今和歌集巻第二十

大哥所御歌

おほなほひのうた

新しき年の始にかくしこそ
千とせをかねてたのしきをつめ
日本紀には つかへまつらめよろつよまてに

ふるきやまとまひのうた

しもとゆふかつらき山にふる雪の
まなく時なくおもほゆるかな

あふみふり

あふみよりあさたちくれはうねのゝに
たつそなくなる明ぬこのよは

水くきふり

水くきのをかのやかたにいもとあれと
ねてのあさけの霜のふりはも

しはつ山ふり

しはつ山うち出てみれはかさゆひの

嶋こきかくるたなゝしを舟
神あそひのうた
とりもののうた
神かきのみむろの山のさかきは
神のみまへにしけりあひにけり
霜やたひおけとかれせぬ榊葉の
たちさかゆへき神のきねかも
まきもくのあなしの山の山人と
人もみるかに山かつらせよ
み山にはあられふるらしと山なる
まさきのかつら色付にけり
みちのくのあたちのまゆみわかひかは
末さへよりこしのひ〳〵に
我かとのいたゐのし水里とをみ
人しくまねはみくさおひにけり
ひるめのうた
さゝのくまひのくま川に駒とめて
しはし水かへかけをたにみむ
かへしものゝうた
あを柳をかたいとによりて鶯の

ぬふてふかさはむめの花かさ

まかねふくきひの中山おひにせる
ほそ谷川のおとのさやけさ

この哥は承和の御へのきひの国の哥

美作やくめのさら山さらさらに
わか名はたてし万代まてに

これは水尾の御への美作の国の哥

みのゝ国せきの藤川たえすして
君につかへむ万代まてに

これは元慶の御へのみのゝ哥

君か世はかきりもあらしなかはまの
まさこの数はよみつくすとも

これは仁和の御への伊勢の国の哥

大伴のくろぬし

あふみのやかゝみの山をたてたれは
かねてそみゆる君かちとせは

これは今上の御への近江の哥

東哥

みちのくうた

あふくまにきりたちくもりあけぬとも

君か代はしまれなきこそかなし
みちのくは流れかれなき塩海の
浦にくる舟の流るてふ秋はたに
秋せは秋まつ風ふきて吉野の
まつ秋の形のまつにこそなかりき
おもひきや花こそのこる雨の名か
秋の流になはしといふ雨をと
みなのひかえきとも世なりの
木の下露の雨よもきれ秋
りよみ川のわかれかにほひの宿の

いろそはあはれよの月かな
君か代はちよにかはらて心やすく
末の松山なみのこゝろもちらす
さりとて
みちのくのいまもちかひのふかき
めくみはかはらぬおもひそかれ
ひくちらうた
流ゆくはねのこゝろのうへにも
君をみるけふはほかによそにす
津くまのの宮のりみちは露たり

しるもしらぬもなへてかなしも
かひうた
かひかねをさやにもみしかけゝれなく
よこほりふせるさやの中山
甲斐かねをねこし山こし吹風を
人にもかもやことつてやらん
伊勢うた
をふの浦にかたえさしおほひなるなしの
なりもならすもねてかたらはむ
冬の賀茂のまつりのうた

藤原としゆきの朝臣
ちはやふるかものやしろのひめこまつ
よろつ代ふともいろはかはらし
家々称証本之本乍書入墨
滅哥今別書之
巻第十　物名部
ひくらし　滋春
そま人は宮木ひくらしあし引の
山のやまひこよひとよむなり
在郭公下空蝉上

暁月

かきくてもなにはわたりの海のおもてゆ
くもゐのはるかにしらすのそ
なかきよの末女御下
くれのおと　清か様
うつろふる月清き光の月の
おもかけをうかへしものをうつる月
思ふ事の利負下
なかれぬ月こゝろし海
あるのまつら

おもかけのみならす秋風おもゑにはなるいは
きてしまくのはなれなるもの
かはらと清の下
そなたの　あかし
あやめら
うれしさはこなたなるのそのあき
雲のあなたのふしのやまた
このさいは水の谷のみちの浪ぞ
ゆくへなくへく波のやまかは
よるなき

桂宮下

巻第十二

奥山の椎しはにかくれすむ宮も
ふる人をもち宮心をおほゐ川
かゝるなかにおもひかはしてきよう
色ものこれわかさき山のこのはさき
かりに出ても恋しくてこそかへれ

巻第十三

こひしくもあさてつかぬあま雲の
いぬかみのとこの山なるいさや川
いさとこたへてわかなもらすな
このもとにちるもみちのかけくるの
わかなのみおもひかへつるし

返し

う殿えのおまえ 中納言

山さとの春秋のもみちの春にこそ
人のこゝろのつらさしられき

巻第十四

おもひてぬしものとのかせや秋
そらにのみいひおきのはるかなみ
しらせたひのさくらせつれて

秋せこかくいひけるにさくらかみの
くもの上まてひゝきわたるとも
源兼文云しといふ名はまたし
しさうらん下　待つゆき
たゝへはなるゝもゆくかな行の之乃
こゝにおもてかゝるをうけすれなき

右一冊者或人之
依所望書写畢

十二月日

源宣慶

以下
６丁
白紙

古今集

源宣長筆

全